第 1 日　9 月 28 日（土）

シンポジウム I（10:00～13:00）　　A 会場（N2 講義室）

68 年世代を再考する
― シュトラウス、ハントケ、イェリネク、ファスビンダー
Eine Revision der 68er ― Strauß, Handke, Jelinek, Fassbinder

司会：渋谷哲也

○全体要旨

現代文学とはいかなる時代の文学なのか。文学と作家はその時代や社会情勢の中にあるものだが、時代そのものが刻々と変化するにもかかわらず、作家や作品に対する評価は固定化したレッテルとなりやすい。例えば 20 世紀後半のドイツ文学を概観したとき、戦後文学､68 年世代の文学、ドイツ統一後の文学など、各時代において典型的な呼び名が登場してきたが、それらに当初見出されていた同時代性は、時代の変化の中でいかに読み替えられていったのか。「現代」文学という歴史化に抗うものが実は歴史となってゆく中で何が残り継承されるのか。こうした現代文学が抱えるジレンマとその先の可能性について改めて検証してみることが本シンポジウムの狙いである。

対象とする作家は、同時代と歴史の狭間において「現代」を問い直す潜在力を現在まで保持している者たちである。具体的には 68 年世代にあたるボートー・シュトラウス(1944-)、ペーター・ハントケ(1942-)、エルフリーデ・イェリネク(1946-)、ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー(1945-1982)を取り上げる。彼らは 60 - 70 年代の政治の季節の只中で創作活動を開始し、社会に向けた批判的な言説やスキャンダラスな話題性により毀誉褒貶の評価を受けてきた。しかし彼らの作品は政治運動とは明確な距離を取ったものであり、あくまでも彼らの創作活動が時代と歴史への挑発となってきた。また他の共通点として文学・演劇・映画など様々なメディア・ジャンルを横断した創作およびポップカルチャーへの接近があり、文学と社会の関係性自体の変化という主題系と密接に関わりあっている。

文学や芸術において政治的発言力が自明視された時代は過ぎ去った。だが時代の文脈から切り離して作家や作品に対峙することも不可能である。そもそも作家はただ一つの時代の申し子ではなく、その後も生き続けて独自の主題やスタイルを展開してゆく。そこにいかにして作家の「現代性」を確認できるだろうか。

このシンポジウムは、最終的に 21 世紀の現在における文学・芸術のあり方そのものを問う試みとなるだろう。90 年代以降グローバル化による激烈な価値

の相対化を経た中で、68 年世代の「現代」を再検証することから始め、様々な「現代」の重層性の中を往来することになるだろう。文学・芸術は政治的プロパガンダの手段ではない。しかしそれは個人的趣味と消費の領域だけに自足させられるものでもありえない。同時代の芸術と芸術家に対する政治的モラルの要請、自律的な美の領域に重きをおく評価、どちらも紋切型として持ち出されやすい主張である。ではその彼方にあるもの、もしくはその紋切型を改めて距離化した視点で見直した時に浮かび上がるものとは何か。この 4 人の作家たちを 21 世紀の現代文学につながる者たちとして評価の契機を探ることにより、「現代」の多面的な位相を捉えてみたい。

１.「頭脳の映画」と「意識の演劇」
― ボートー・シュトラウスの戯曲『ヒポコンデリー症の奴ら』について

大塚　直

1970 年代初頭のドイツ演劇には、P・ハントケ『ボーデン湖上の騎行』(1971)、T・ベルンハルト『無知な者と狂気な者』(1972)、そしてシュトラウス『ヒポコンデリー症の奴ら』(1971)など、言語機能と同時に意識の在り方を問い質す作品が見られる。今日の視座から言語・意識・メディアに着目すれば、G・ドゥルーズが『シネマ２』(1985)において脳内における独自の時間の経過を映像化した当時の実験的な作品群を「頭脳の映画」と呼んだように、これら「意識の演劇」にも、情報過多によって錯綜した意識の世界から主体の言説や記憶やアイデンティティを問い質すなど、新しい映像表現との間にパラレルな関係性を見出すことができる。実際に、「テアター・ホイテ」誌の批評家時代のシュトラウスは、ハントケの一連の言語実験劇の成果を認め、ファスビンダーのメロドラマ的手法を賛美し、メディア社会によって馴致された意識を批判する点で劇作家ホルヴァートは映像作家ゴダールと関係があると論じていた。そしてヒッチコックやアントニオーニなど 1950-60 年代の新しい映像美学を演劇に持ち込み『ヒポコンデリー症の奴ら』でデビューするのである。本発表では、主にヒッチコック映画を補助線としながら、当時の新しい映像表現が戯曲テクストに及ぼした影響を探る。と同時に、そこにメディア批判の視座をも読み込み、当時の政治性の内実を再考するとともに、68 年世代を起点とする新しい作劇法について考える。

２．ペーター・ハントケの「物語の言葉」

宗宮朋子

ペーター・ハントケは、書評などにおいて、「彼の世代を代表する作家」と称されることが多い。初期の言語実験的な劇作品から始まり、その後の自伝的な作品、「書くこと」そのものをテーマとした作品、1990 年代以降は主に旧ユーゴスラビア問題に関連する作品や発言で、ハントケは常に話題の人であり続けてきた。50 年近くにわたる彼の作家人生において、今もなお彼についてまわるのは、とりわけデビュー当時の「ポップスター」のイメージと 1990 年代以降の「親セルビア」のイメージである。これらのイメージが出来上がった際、周囲からの批判に対して、ハントケは自分の文学における「物語の言葉」の重要性を説いている。本発表では、デビュー時(1960 年代後半)と旧ユーゴスラビア問題に関することで物議をかもした時(1990 年代後半)のハントケの作品およびエッセイを研究対象とする。デビュー時については、既存の文学に対する批判が表れているエッセイ集 Ich bin ein Bewohner des Elfenbeinturms(1972)、旧ユーゴスラビア問題の時期については旅行記 Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morawa und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien(1996)を中心に取り上げる。とりわけハントケと旧ユーゴスラビア問題についてはすでに多くの研究がなされているが、その旧ユーゴスラビア問題の時期のハントケの詩学がデビュー時から一貫したものであることを、彼の「言葉」に対する考えを手掛かりとして明らかにしたい。

３．記憶の〈重なり〉の可視化
― *Das Über Lager* に示されるエルフリーデ・イェリネクの詩学

福岡麻子

本発表では、エルフリーデ・イェリネクの諸テクストを、多様な層の「重なり」という観点から考察し、「多層性」が彼女の詩学の根本を成していることを明らかにする。

イェリネクを特徴づける文学的手法には、引用や言葉遊びがある。既存のテクストと新たな文脈が重ねられ、異なる意味を持つ複数の言葉が音を介して重ねられるといったこれらの手法は、単に彼女の文学的意匠にとどまるものではない。イェリネクが「犠牲者神話」に象徴されるオーストリア現代史を問い直してきたことに照らせば、これらの手法はむしろ、集団の記憶の「(つみ) 重なり」を表現する方途として重要である。

本発表で中心的に扱う *Das Über Lager*（1989）は、引用や言葉遊びの孕む「重なり」とは異なり、部分的に二つのテクストが重なって印刷された、とも

すれば印刷ミスのような印象さえ与える作品である。発表では、引用や言葉遊びとも比較しつつ、この作品の視覚的な「重なり」が持つ意義を、歴史的文脈に照らして明らかにする。

その際、イェリネクと同世代の作家たちがしばしばメディア横断的な方法を試みていることに着目し、テクストの造形性を際立たせる彼女の方法が、その中でどのような位置づけにあるのかを考察する。そして、メディア横断的な方法は〈現代文学〉に期待される現代性に寄与するのか、するとすればどのようにしてなのか、そのあり方の一端を示す。

４．テクスト・歴史・身体の引用
― ライナー・ヴェルナー・ファスビンダーのオリジナリティ

渋谷哲也

ライナー・ヴェルナー・ファスビンダーは、モダンでありつつポストモダン的手法（模倣・折衷主義・相対化）を濫用する点が特徴的である。ハリウッドの黄金時代とそれを引受けたニューシネマ(ゴダール等)の関係性が参照され、映画、テレビ、演劇、文学という多様なメディアの間を往還する。しかも既存の左翼文化とは一線を画し、歴史の連続性に意識的でありナチ時代や 50 年代の大衆文化も積極的に引用する。そこでのオリジナルと模倣の関係性は一見価値が転倒しているが、作家独自の視点やスタイルは決して失われることはなかった。

こうした独自性は、ファスビンダーがアンダーグラウンド演劇および自主製作映画からメジャーへと活動場所を移しても創作態度を根本的に変えなかった点にも顕れている。しかも彼は演劇的な作法を映画にも援用し、既存のテクストと演出の緊張関係を明示しつつブレヒトとは異なるやり方で異化効果を実現し、通俗性と実験的手法を同時に取り入れることで、メロドラマ等のジャンル様式をその歴史的コンテクストも含めて内部から解体したのである。文学作品の脚色映画においても、原典の忠実さを守りつつ独自のコンテクストを構築するファスビンダーの創作方法は、ポストモダン以降においてもっとも「政治的」かつ「現代的」なものと見なしうるのではないか。

シンポジウム II（10:00～13:00）　　B 会場（N1 講義室）

語彙意味論と構文関連情報の相互作用
Wie interagiert die lexikalische Semantik mit konstruktionsrelevanten Informationen?

責任者要旨

語彙意味論をもっとも厳格に定位しようとすれば、統語部門への宣言的な入力の意味論的側面として捉える語彙論的立場が想定できよう。しかし本シンポジウムでは、（変異体的な）多義性(Polysemie)を積極的に認めていく立場を取りたい。語彙論的立場では、語彙部門内の関係づけは複雑化できるとしても、これらは（項目的）多義性(Ambiguität)と捉えるしかない。変異体的な多義性を認める立場を取るならば、変異体的な多義性を論うだけでなく統語論となじませる方策を探らねばならない。それは、語彙論と統語論の関係を再考することに他ならない。

本シンポジウムで扱われる多義性を現す現象は多岐にわたっているが、構文的情報との相関性を示すのが特徴的である。しかし問題となっている多義性を単に構文の相違に帰していくだけでは、構文間の多義性は解消されないままとなる。したがって、（変異体的な）多義性と構文的情報との相関性を把握するには、構文間の関係も重層的に定義する必要がある。重複する情報の記述を細分化するだけでなく、重層性の性格を明確にする理論が必要となることになる。

ここでいう構文間の関係の重層性は、ひとまず統語的な問題であろう。しかし本シンポジウムで目指しているのは、意味論的アプローチである。統語的に重層的に把握された情報の重複も、最終的に意味的な解釈を伴わなければ本来意味がない。森の発表では、たとえば副詞の問題が扱われる。副詞・心態詞が証拠性として用いられるか様相性として用いられるかは統語的にも重層的に把握され得るが、その間の意味論的関係も明らかにすることを本シンポジウムでは目指したい。また Kaufmann の発表における中間態と結びつく副詞の分析においても、副詞が捉える概念軸と項構造との相関性を追究することで、語彙意味の多義性と構文的情報との相関性の一端が明らかにされることになろう。他方動詞語彙を扱う場合でも、たとえば青木の発表におけるように反使役におけるアスペクト情報が項構造と関連していることを示したり、また高橋の発表におけるように放出動詞の他動性の相違と可能な項構造の間の関連を示すことで、語彙意味の多義性と構文的情報との相関性を指摘することができよう。

まとめれば、本シンポジウムの狙いは、語彙意味の多義性と構文的情報との相関性を文意味のさまざまな側面で明らかにしつつ、そこに働く意味作用を語彙意味に由来するものと構文的・構造的情報に由来するものに振り分ける作業を進めることに他ならない。構文の多様性に驚いている時代は過ぎたのであり、

多様な構文を探索する作業は計算機で素早くできる時代は到来したのであり、だからこそ人間はなおさら何故を問わなければならないのではないだろうか。

［第１発表］

モダール副詞・不変化詞から見た話者のコミットメント

森　芳樹

本発表では、副詞、心態詞の問題を扱いながら話者のコミットメントの概念を精査する。統語論では独立した発話内行為の成立と発話内行為の話者への固定が別々の要素として取り出されることがあるが、副詞・心態詞が証拠性、様相性的意味として用いられる際に問題となるメンタル・コミットメントは、発話内行為とは区別されることを本発表では主張したい。そのことを通じて、語彙意味の多義性と構文的情報との相関性の議論に貢献したい。

話者のコミットメントの概念は実用論研究で既に問題にされたのではあるが、近年談話と統語のインターフェイスを問題にする文脈で再び問題にされた（z.B. Haegeman, Tenny）。話者のコミットメントの概念はまた、形式意味論においても発話内行為に直接関連づけられる場合だけでなく、証拠性など広義のモダリティが問題になる場合でもコミットメントを発話内行為のレベルに設定するアプローチが目立つ（Krifka 2001, 2012, Faller 2013）。モダリティを論じる際に量化とは別に強度、距離などの概念などで捉えられ、量化と同時に立ち現われるとされた話者のコミットメントの概念を本発表では詳細に検討し、その概念の文法的位置づけについて考える。発表者の先行研究の立場に立ちながら、このコミットメント概念が典型的な発話内行為とは区別して捉えられるべきであることを示す。

［第２発表］

Adverbiale in Medialkonstruktionen

Ingrid Kaufmann

Medialkonstruktionen (MK) wie *Das Buch liest sich leicht* sind von agentiven Verben abgeleitete Konstruktionen mit generischer Lesart, bei denen der Agens implizit ist und ein Adverbial realisiert werden muss. In semantischen Analysen besteht weitgehend Einigkeit darüber, dass MK 'disposition ascriptions' sind, also dem Subjektreferenten eine dispositionelle Eigenschaft zuschreiben. Mit Hilfe der Adverbiale werden produktiv ad hoc-Kategorien zur Charakterisierung des Subjektreferenten abgeleitet. Trotz der zentralen Rolle der Adverbiale bei der Ableitung wurde bisher kaum untersucht, welche Adverbiale in MK möglich sind und wodurch ihr Auftreten lizensiert bzw. beschränkt wird. Obwohl es eine relativ

kleine Gruppe von Adverbialen ist, die im Großteil der MK auftritt (*leicht/schwer*, *gut/schlecht* und ähnliche), erlauben Verben mit einer relativ komplexen semantisch-konzeptuellen Struktur wie etwa *lesen* eine Fülle von Adverbien, die auf unterschiedliche Bedeutungsaspekte Bezug nehmen.
Basierend auf Belegen aus dem Internet wird untersucht, welche Adverbiale möglich sind und wie sie semantisch in den MK verankert sind. Die Ausgangshypothese ist, dass MK das Interpretationsschema "Die Manipulierbarkeit von SUBJEKT beim Vorgang VERB ist GUT/SCHLECHT" zugrunde liegt. Die Adverbiale müssen über das durch die Komponenten der Konstruktion bereitgestellte konzeptuelle Wissen als Instanzen der Parameter GUT/SCHLECHT interpretierbar sein.

［第３発表］

ドイツ語反使役動詞の形態的実現と語彙的アスペクトの解釈

青木葉子

状態変化を表す動詞のうち，同形態で使役動詞としても用いられる *zerbrechen* や (*sich*) *öffnen* のような動詞を，本発表では反使役動詞と呼ぶ。フランス語 (Labelle 1992) やイタリア語 (Folli 2002) など，いくつかのヨーロッパ言語においては，反使役動詞に自動詞と再帰動詞の形態が現れるが，この形態の違いには，動詞の語彙的アスペクトの意味が関与していると言われている。具体的には有界性 (Telizität) の違いであり，再帰形の反使役動詞は現在完了時制で有界的解釈を受けるのに対し，自動詞形の反使役動詞は非有界的解釈を受ける傾向があるという。ドイツ語の反使役動詞も同様にこのふたつの形態を示すが，先行研究においては，例えば Schäfer (2008) が，語彙的アスペクトの観点からその形態的実現を矛盾なく説明することができないと主張している。そこで，本発表では，反使役動詞におけるアスペクト解釈を調査し，ドイツ語においても有界性の違いが反使役動詞の形態に影響を与えることを指摘する。さらに，日本語の *e* 接尾辞が付加された自動詞と *ar* 接尾辞が付加された自動詞もテイル構文において類似した振る舞いを示すことから，反使役動詞の持つ意味構造を考察する。

［第４発表］

動詞の意味と項実現

高橋亮介

特定の構文交替に参与するという点で共通性を有し，一般に「動詞類」を構成すると考えられている複数の動詞は，厳密にはあらゆる統語環境において等しく生起できるわけでなく，可能な構文パターンの総数および種類という点にお

いて異なる場合がある。そうした事例の一つとして「放出動詞」と呼ばれる動詞類を挙げることができる。この動詞類に属する *rauchen*, *läuten*, *qualmen*, *rascheln*, *knirschen* などの動詞は 1 項動詞としての用法と虚辞 *es* を伴う非人称用法との間で交替を示すという点では共通しているものの（Cf. *{Eine Glocke / Es} läutet*, *{Die Zeitung / Es} raschelt.*），2 項動詞としての用法という点に着目した場合には，これが可能な動詞と可能でない動詞という 2 通りの下位類が認められる（Cf. *Er läutet eine Glocke* vs. **Er raschelt die Zeitung.*）。本発表では，こうした下位類間の違いが何に起因するのかという問題の追究を通じて,項実現の多様性を支える原理の解明を試みる。その追究にあたっては，2 項動詞としての用法が可能な場合の主語項と目的語項との間にどのような意味上のつながりが認められるか，また，これら項と放出動詞が語彙化していると考えられる意味要素との間にいかなる関係が成立しているか，といった点に着目する。

口頭発表：文学 1（10:00～11:55）　　C 会場（E310 講義室）

司会：吉田 徹也，川合 増太郎

1.書かない主人公―フランツ・カフカの三長編小説における権力関係と「書くこと」

下薗　りさ

「書くこと」はカフカ文学に通底するテーマのひとつである。この問題を伝記的、実証的そして詩学的側面から多面的に扱ってきたこれまでの先行研究は、一言でまとめると、「書くこと」について書くというカフカ文学の特徴を導き出した。カフカ自身の書く行為に焦点を当てたこの特徴は、作品そのものにも当てはまるだろう。作品における「書くこと」は、ひとつには作中に描かれる書く行為そして書かれたものとして理解しうる。だが、このような「書くこと」は、第一に権力の問題である。『流刑地にて』（1914）における記述する処刑機械と記述される身体の関係だけでなく、例えば『判決』（1912）においても、中心となる主人公と父親の対立が手紙というメディアをめぐる対立となっていることをキットラーが指摘している。

「書くこと」が持つ権力としての側面は、三長編小説『失踪者〔アメリカ〕』（1912-14）、『訴訟〔審判〕』（1914）、『城』（1922）においてますます強く現われる。個人対社会という長編に共通する対立構造が、書かない主人公たちと書く官僚機構との対立という、「書くこと」をめぐる対立となっているのだ。本発表では、カフカの三長編小説における対立関係を「書くこと」という観点から分析し、作家としてのカフカの行為が、「書くこと」を通して「書くこと」を否定する試みを描き出すという、一種の反転を孕んでいることを明らかにする。

2.ゲシュタルト論争―ベンヤミンのグンドルフ批判

宇和川 雄

「ゲシュタルト（Gestalt）」という言葉は、ゲーテの『形態学』以降、ゲシュタルト心理学、ゲオルゲ・クライス、そして最後には 1930 年代の「ナチ神話」において、「部分の総和を超える全体」について語るためのキーワードとなる（Simonis 2001, Lacoue-Labarthe 2002）。本発表では、1910 年代にゲオルゲ・クライスが構築したゲシュタルト理論をこのディスコースの大きな転換点ととらえ、この理論を完成したフリードリヒ・グンドルフと、それに対するヴァルター・ベンヤミンの批判の、鋭い対立に焦点をあてる。グンドルフのゲシュタルト理論の特徴は、「カオス」の無秩序に対抗するためには、「ゲシュタルト」という目に見える範例が必要だと考える点にある。その理論は 1916 年の『ゲーテ』において完成され、そこでは「ゲーテ的なゲシュタルト」がドイツの歴史をか

たちづくる原動力として考えられている。しかしこのような特定の原型にもとづく歴史叙述は、ベンヤミンにとっては歴史の歪曲であり、認められるものではなかった。ベンヤミンは 1922 年の『ゲーテの親和力』のなかで、グンドルフへの全面的な批判を展開することになる。ベンヤミンはグンドルフの何を嫌い、ゲーテをどのように読み直そうとしたのか。争点となるのは、グンドルフの「ゲシュタルト」の概念である。本発表では従来の研究では見落とされてきたこの批判に焦点をあて、ゲシュタルト理論の高揚のなかで書かれたベンヤミンのゲーテ論の意義を考察する。

3.小説理論における悲嘆の連鎖 ―そのテクスト解釈と文化的背景についての一考察

北原 寛子

本研究の対象は、F・シュレーゲルらによる 19 世紀初頭からルカーチをはじめとする 20 世紀にかけての小説理論のテクストである。ここでいう小説理論とは、ジャンル一般についての美学的概念規定にかかわる包括的議論から個別の作品の批評にいたる小説にかかわる二次的なテクスト全般を指している。

従来これらのテクストはそれ自体が小説研究の成果であり、先行研究として参照されるべきもので、総合的に考察されてはこなかった。しかし本研究でこれらを幅広い観点から分析する理由は、悲観性という共通の特徴に注目しているからである。悲観性はいくつのパターンに分類できる。一例にルカーチが小説を「神に見捨てられた世界」に成立した「先験的に故郷を喪失した形式」と呼んだことが挙げられる。その前後にいくつかの例を認めることができる。小説理論に神が引き合いに出される理由は、それらのテクストが著者の精神を反映しているためではなく、18 世紀から続く議論を元にしているからである。根源となったテクストは多岐にわたり、歴史哲学であった場合もある。喪失や幻滅といった小説理論に典型的な悲嘆が、テクストが継承されていく過程で登場したいわばレトリックであることを確認した上で、小説をこうした悲観主義と切り離して考える可能性を提示することが本研究の目的である。

口頭発表：文学 2（10:00～11:55）　　D 会場（E301 講義室）

司会：田中　剛，高橋　修

1.**Der historische Roman als postkoloniale Kritik? Die Demontage von Pazifik-Bildern in Lukas Hartmanns „Bis ans Ende der Meere"(2009)**

Thomas Schwarz

Hartmanns Roman steht in der Tradition von Kehlmanns *Die Vermessung der Welt* (2005). Der historische Roman fungiert hier als Medium der postkolonialen Reflexion über die Folgen der Entdeckungsreisen. Ich lese ihn vor dem Hintergrund der Thesen, die Gabriele Dürbeck mit dem Konzept des *Ozeanismus* (2007) zur Diskussion gestellt hat, als einen Beitrag zur literarischen Modellierung des Pazifiks.

Der Roman demontiert die Vorstellung, dass die Expeditionen Cooks heroisch das philanthropische Projekt der Aufklärung in den Pazifik getragen hätten. Aus der Perspektive des Malers John Webber wird das Zustandekommen von Webbers Halbakt der ‚Prinzessin' Poetua während des Aufenthalts auf den Gesellschaftsinseln als Ergebnis von Sitzungen präsentiert, die das exotische Modell nicht in der tropischen Natur, sondern während einer Geiselhaft auf der *Discovery* abzusitzen hatte. Cook wird als Autokrat charakterisiert, der vor der Anwendung von Gewalt nicht zurückschreckt, wenn die Insulaner seinen Begriff des bürgerlichen Eigentums nicht respektieren sollten. Die wissenschaftliche Entdeckungsreise führt der Roman als Ausgeburt einer Vermessungsmanie vor, die sich aus einem kolonialen Begehren (Young) speist. Ein Kommentar Webbers erklärt, dass es in erster Linie darum gehe, die neuentdeckten Inseln „zu plündern".

2.機械仕掛けのイヴ―E.T.A. ホフマンの『砂男』におけるアダムとイヴのモチーフ

土屋 京子

アダムとイヴの犯した原罪をキリスト教的な文脈から切り離して捉えなおし、人間本性をよりふかく理解しようとする哲学的解釈は、18 世紀啓蒙主義以降よ

り顕著になり、後の文学者の想像力を刺激することになる。本発表で扱うE.T.A.ホフマンの『砂男』（1816）は、原罪の理論を借用することで、自意識を肥大化させ、自然を掌握しようとする近代人を鋭く省察している。

この作品に登場する自動人形は、昏睡状態に陥ったナタナエルの眼球を犠牲にして生みだされ、眠るアダムの肋骨から誕生するイヴに重ねあわされている。自然科学に従事する「砂男」たちは、ナタナエルと自動人形の生みの「親」であると同時に、新たな世界認識と自己意識の肥大化をもたらす光学器をナタナエルに与えることで、原罪へと誘う「蛇」としての役割も担っている。そして光学器により自動人形を性愛の対象として見るようになったナタナエルは、「彼女」とともに悲劇的な結末をむかえるのだ。

本作品の神話のモチーフについては、フロイトの砂男論を中心に、ナルキッソスやエコーの神話に基づく解釈が、今なお研究の第一線になっている。また、ピグマリオン神話の変遷のなかにこの作品を位置づけている研究もあるが、「楽園神話」という視点から論じているものはない。以上を踏まえて、本発表は、当時の自動人形にまつわる思想的背景とロマン主義美学との関係性、近代的自我と認識に関する問題、ロマン主義的愛と狂気など、これまで個別に論じられてきた主要なトピックスを「近代のアダムとイヴ」という切り口によって集約し、本作品の新たな読みを提示することを目指している。

3.芸術創造において相容れぬ〈女らしさ〉と〈女であること〉
―ドロステ＝ヒュルスホフの未完の悲劇『ベルタ、あるいはアルプス』における両性具有のイメージについて

麻生 陽子

若きドロステによる〈女であること〉の問いかけは、男女の悲恋を題材とした悲劇『ベルタ、あるいはアルプス（Bertha oder die Alpen）』（1814）において始まった。ジャンルとジェンダーの掟破りとも言うべきこの試みは完遂されなかったが、そこで描かれた二分法的な性規範への批判や、女主人公の結婚の成就を大団円とする結末からの逸脱は、シラー等のドイツ古典主義作品の影響を受けた「ドラマ的な私小説」という従来の解釈を一変させ、音楽史やジェンダー論からの近年における再評価へとつながっている。

18世紀後半以降、多分野で登場した性をめぐる言説が融合していくなか、男女の二分法的な「性的性格」が整備されていった。公私に分割された男女の活動空間は、しかし書く女性の増加を背景に、芸術創造の領域において重なりあうようになり、そこに生じた緊張関係はさらに、男女で非対称に価値づけされた両性具有のイメージに反映されることになる。情緒や直観に代表される〈女性性〉は「天才」の資質として格上げされ、観念的な次元において、完全性や

調和を体現する両性具有的な芸術家像へと収斂される一方、女性の両性具有は貶められていく。

本発表では、指摘程度にとどまっていた「ふたなり（Zwitter)」と呼ばれるハープ弾きベルタと、〈女性性〉を備えた芸術家フェルスベルク、二人の登場人物の両性具有性に着目することで、そこに表出されたジェンダーと芸術創造との相関関係の一端を示し、「ふたなり」として女の現し身を生きることの意味を問い直したい。

口頭発表：ドイツ語教育（10:00～11:55）　　E 会場（E201 講義室）

司会：Matthias Grünewald，塩谷 幸子

1.PASCH 校生による「ドイツ語新聞」の制作とその指導
―A1, A2 レベルでのドイツ語表現の可能性

山崎雄介・柴田育子

ドイツ外務省と Goethe-Institut などによる高等学校や高等専門学校などを対象とした国際交流プロジェクト PASCH（Schulen: Partner der Zukunft）における活動のひとつとしてドイツ語新聞の制作がある。

外国語によるより高い自己表現力を学習者が身につけるためには、単独の文のドイツ語訳だけではなく内容のある文章を書くという経験も必要であろうが、その機会は少ない。また、まだ充分な語彙数も文法知識も持ち合わせていない初心者・初級者がそのようなことを学ぶのは時期尚早と思われる向きもあろうが、当該の活動における実例を見る限りにおいては、充分に可能であった。

本来ジャーナリズムには、語彙にせよ文法にせよ文体にせよ高度な総合的ドイツ語運用能力が不可欠であると同時に、豊富な経験が求められることについては論を待たない。しかし当該の活動においては CEFR によるドイツ語レベル A1 や A2 といった初心者・初級者が中心となって「新聞」という形でドイツ語で文章表現するという、一見すると無謀とも思えることが、もちろん本物の新聞からはほど遠いながらも、継続的に行われている。

本発表ではまず、新聞制作の全体的な過程について説明し、次に、執筆者から提出された直後の原稿と柴田や山崎らによる指導後の原稿とを比較することによってドイツ語初心者・初級者のボキャブラリーや文法や文体に関する問題点を提示する。最後に、前後の脈絡を考えながら文章を書く機会が比較的少ないという現状を克服する手段としてのドイツ語新聞制作を提案するとともに、これを課外活動として行う際の限界と仮に授業の枠内で行う場合に生ずるであろう問題点について考察する。

2. Sprachlernspiele im Unterricht: Wie stehen die Lernenden dazu?

Katrin Niewalda

Sprachlernspiele können, wenn man ihnen Raum gibt, im Lernprozess eine wichtige Rolle spielen. Gerade im japanischen Lehr- und Lernkontext, in dem es manchmal schwierig ist, die Studierenden aktiv in den Unterricht einzubinden, können Sprachlernspiele ein Mittel sein, um bestimmte

Unterrichtsphasen lernerzentrierter zu gestalten. Spiele sind daher nicht nur als Lückenfüller oder lediglich als Motivationsmittel zu sehen, sondern als ernstzunehmende Arbeitsform, die verstärkt seit der kommunikativen Wende im Unterricht Deutsch als Fremdsprache eingesetzt wird. Die Effektivität von Sprachlernspielen wurde u.a. von Jentges (2007) nachgewiesen.

Mit Hilfe von Gruppeninterviews wurde versucht herauszufinden, ob Lernende im ersten Studienjahr Spiele für ihr Lernen als hilfreich einschätzen. Es wurde deutlich, dass die Studierenden Sprachlernspiele für eine geeignete Unterrichtstechnik halten, weil sie den Eindruck haben, dass sie ihnen beim Lernen helfen, so z.B. beim Wiederholen und Automatisieren von Strukturen. Es spielen jedoch auch soziale Aspekte eine wichtige Rolle, da Spiele kooperatives Lernen in unterschiedlichen Gruppenzusammensetzungen ermöglichen, was die Lernenden sehr positiv sehen. Spiele werden zudem als gute Ergänzung zum Lehrbuch gesehen, das die Studierenden, im Gegensatz zum Spaßfaktor bei Spielen, mit ernsthaftem und manchmal auch langweiligem Lernen zu verbinden scheinen. Übereinstimmungen finden sich in den Studien von Yoshimitsu (2006) und Shimamura (2001).

3. Mehr Lesemotivation durch Hörverstehen

Gabriele Christ-Kagoshima

Mit einer kleinen Gruppe von Deutsch lernenden Studenten im zweiten und dritten Studienjahr wurden in einem Pilotprojekt, das in Zukunft noch erweitert werden soll, folgende Thesen überprüft.

1. Hörverstehensaufgaben im Zusammenhang mit literarischen und nichtliterarischen Texten, in denen wesentliche inhaltliche Charakteristika erfasst werden sollen, führen möglicherweise zu schnellerem Lesen und Verstehen derselben Texte.
2. Wiederholtes Hören fördert Aussprache und Orthographie und motiviert zum Sprechen über das Gehörte und Gelesene.
3. Dem Lesen vorgeschaltetes Hören motiviert zu weiterem Lesen.

Versuche im englischsprachigen Bereich gibt es schon. Sie scheinen auf die Verbesserung von Leseverstehen und -motivation durch vorherige Hörverstehensübungen hinzuweisen (vgl. Bamford 2004, Brook Antle 2011). Kurze interkulturelle Sachtexte wie auch literarische Texte zu den Themen Essen, Medien, Musik und deutsche Städte wurden zunächst durch Hören mit globalen Hörverstehensaufgaben eingeführt, danach gelesen und wiederholt mit komplexeren Textaufgaben erarbeitet. Nach jeder Seminarsitzung wurden die Studenten zum Schwierigkeitsgrad befragt. Nach jedem Thema konnten die Studenten eine schriftliche Hausaufgabe zum Thema abgeben und am Semesterende wurde ein Test, eine Kombination von Hör- und Leseverstehen zu den durchgenommenen Themen, durchgeführt. Von der Lehrkraft wurde der zeitliche Verlauf der Unterrichtsphasen jeder Seminarsitzung aufgezeichnet. Die bisherigen Ergebnisse, die noch nicht als repräsentativ bezeichnet werden können, ermutigen, das Projekt in einem größeren Rahmen weiterzuführen.

ブース発表（11:30～13:00）　　F 会場（E312 講義室）

環境教育における文学の射程

松岡 幸司

本報告では，まず「環境問題に対して，文学研究がどのようなスタンスをとることができるのか」という問いに対して，環境教育における環境文学研究のスタンス・意義を明確にする．その際に，環境問題を自然科学的な視点のみでとらえるのではなく，人間の心そしてアイデンティティの問題としてもとらえるべきである点を明確にする．その上で，環境教育における文学の射程について，報告者の担当している教養講義「環境文学のすすめ」の内容を例として，一つのアプローチ方法を提示した後，会場の方々と意見交換を行う．

従来の環境文学研究（対象としては，ネイチャーライティングと，それを含む広義の環境文学作品が含まれる）においては，文学の枠内だけではなく，社会との関連（水俣病をはじめとする公害問題，ネイティヴ・アメリカンに関するマイノリティの問題など）を対象とする研究が進められてきている．しかしその成果を環境教育の中でどのように活かしていくか,という手法については,いまだ未開発の状態にあると言ってよいだろう．

そこで本報告では，環境問題に対する文学からのアプローチの方法を検討することにより，文学研究自体の，現代社会的，実践的な意義を検討したい．それと同時に，共通教育（教養教育）における文学教育についても意見を交換する場ともしたい．また文学研究の成果・内容をどのように教育の現場や教材に反映させていくか，という点についても議論を行いたい．

ポスター発表（13:00～14:30）
G 会場（E311 講義室）
（ポスターは期間中を通じて掲出されています）

『ドイツにおける Sprichwörter の受容に関する考察：歴史的変遷と現状』

梶本 万貴

① 研究対象の説明

本発表では、Sprichwörter へのドイツでの評価の変容について考察する。Sprichwörter は中世から 18 世紀前半頃にかけて、知識人を中心にしばしば用いられていたが、その後次第に粗野な言葉だと評価されるように変容していったとされている。

② 先行研究の成果との関係

- 先行研究では、Sprichwörter への評価の変遷の要因として、小説等のジャンルの充実が挙げられてきた。本発表では、フランス国内での proverium の衰退との関連を示す。

- さらに先行研究では、今日ドイツ人が Sprichwörter を好ましく考えていないとされている。その実態を調べるため、2012 年 3 月にドイツの 2 大学で、ドイツ人大学生 74 名を対象とした質問紙調査を実施した。それによると、以下の結果が得られた。
  ①Sprichwörter を肯定的に捉えている意見が大多数である
  ②家族や祖父母など身近な人から習うものだと認識している
  ③習得する機会が学生時代に十分にあったかは、意見が割れている
  また、回答者の多くは、Sprichwörter を教養の一部としてはみなしておらず、これには歴史的な評価の変遷が少なからず影響しているのではないかと推測する。

③ ポスター発表で主張したいテーゼ

- Sprichwörter が 18 世紀後半以降に、以前ほど使用されなくなった要因の一つとして、フランスの Sprichwörter にあたる、proverium の衰退と関連があることを示す。

- 今日のドイツ人の若者は、むしろ肯定的に Sprichwörter を受け入れていることを示す。

ドイツ語語彙習得を目的としたスマートフォンアプリケーションの開発

橋本 雄太、寺澤 大奈、麻生 陽子

近年のスマートフォン普及率の上昇はめざましい。高校生・大学生の所有率はすでに 5 割を超え、教育の情報化にとってスマートフォンの活用はその重要性を増しつつあるが、日本独文学会においては、いまだスマートフォンに特化した教材開発についての報告はなされていない。発表者は、初学者向けのドイツ語語彙習得用スマートフォンアプリケーション「独単 800」を開発し、2013 年 5 月に Apple ストア上で一般公開した。本発表の目的は、「独単 800」の開発と大学での調査を通じて得られた知見をもとに、教科書との連携なども視野に入れつつ、将来のドイツ語教育におけるスマートフォン活用の可能性を展望することにある。

スマートフォンアプリの開発には通常多大な開発コストが伴うが、発表者のチームはクラウド上のサービスや自然言語処理技術を駆使することにより、開発開始から 2 ヶ月間で「独単 800」を完成させた。この過程で得られたノウハウや技術的工夫は、ドイツ語 IT 教材一般の開発にも資するはずである。また、調査規模は限定されているが、和歌山大学において 19 名の学生の協力のもとに実施した学習効果の測定調査にもとづき、スマートフォンアプリの教育効果について、主に紙媒体教材との比較から報告を行う。さらに、技術的・教育的知見に関する上記報告に加え、「独単 800」をインストールした iPhone 端末の展示、および 機能と収録データを拡張した開発中の次期バージョンの展示も行いたい。

シンポジウム III（14:30～17:30）　　A 会場（N2 講義室）

フロイトの彼岸 ―精神分析、文学、思想
Jenseits von Freud - Psychoanalyse, Literatur und Philosophie

司会：土屋　勝彦

フロイトの思想をその後の文化現象や思想状況に照らして考察するのは、古くて新しいテーマである。最近も、デュフレーヌ『＜死の欲動＞と現代思想』や小林敏明『＜死の欲動＞を読む』あるいは比嘉徹徳『フロイトの情熱―精神分析運動と芸術』などの近刊書において、フロイトと思想や芸術との関係をめぐって論じられており、こうした状況において、改めてフロイトを読み直し、文学や思想におけるフロイト理論の関係性を問い直す試みに多少とも意義があるだろうと考え、本シンポジウムを企画した。文学作品の読み方や解釈におけるフロイト理論の援用・反映から、ドイツの作家や思想家とフロイトの思想的比較考察を経て、フランスにおけるフロイト受容と思想的影響にいたるまで、扱われるテーマは広範囲にわたるが、そこからフロイト理論の文学解釈の可能性やフロイトの文化論・精神分析の持つ意義をあらためて問い直したい。

まず鶴田は、ゲーテの『ファウスト』とグリムの『メルヒェン』における「悪魔」をとりあげ、フロイト自身の悪魔観から分析することによって、フロイト理論よりもむしろ人間フロイトに焦点を当て、人間と悪魔の関係を考察する。山尾は、人間の精神と身体を無定形の複合体と捉えるに至ったフロイトとカフカの思索の源を巡り、フロイトはそれをどのように証明するか、またカフカはいかに文学として描出したかを明らかにする。フロイトとカフカは身体に内在する「病い」という他者性を意識することで〈自ら〉を知り、外在する他者としての「人間」を理解したが、それは他者性を受容し共感することを前提とする作業だといえる。須藤は、フロイトとカフカという同時代に生きた二人の変化に注目していく。フロイトの大きな転換点となった「死の欲動」理論の構築過程およびその理論と、カフカの文学的体験を重ね合わせることで、カフカという人間の内面にどのような変化が生じ、それがどのようにテクストに現れているのかについて明らかにしようとする。山本は、フロイトが提唱した神話や夢の形成力と､ベンヤミンの集団の夢と目覚めの弁証法との比較検証を通して、大衆社会における言語的形象の持つ力学の可能性を明らかにする。フロイトが深層心理にある夢材料に無時間という性格を付して文脈の脱構築を試みたことが、ベンヤミンの詩学において、より大きな歴史哲学的作用を持つ関係性へともたらされているのである。最後に鈴木は、両大戦間のフランスにおける精神分析の受容に焦点を当て、この時期の受容が戦後フランス思潮にどのような影響を与えたかを論ずることによって、フロイト理論の戦後ヨーロッパ思想形成への影響を考察する。

このようにフロイトと文学あるいは精神分析と思想の関係性について、メルヒェンやカフカ、ベンヤミン、フランス思想との関連から共同討議したいと考える。

１．狂気の来る道―ゲーテとフロイト

鶴田　涼子

心の内面の理論、治療法としての精神分析は、父親の死後 1896 年から 1899 年にかけて行った喪の作業から生まれたとフロイトは告白している。彼は論考「17 世紀のある悪魔神経症」（1923 年）のなかで「悪魔と契約を取り交わした男」について報告しているが、フロイト自身もまた「悪魔」の力に魅了された者のひとりであり、空想の助けを借りることによってのみ、フロイトは亡き父への接近を試みることができたのである。

『ファウスト　悲劇第一部』（1808 年）の「夜」の場面でファウストは自身の無知を嘆き、その後、悪魔と契約を交わすに至る。『グリム童話』（1812 年初版）においても悪魔が登場し、人間を唆そうとする場面がある。フロイトは講演「詩人と空想」（1908 年）や論考「神経症者たちの家族ロマン」（1909 年）のなかでしばしば童話や文学作品を引き合いに出し、人は家族間の人間関係を物語に投影し、そこから代替形成を行う可能性を指摘している。

フロイトは、父の死に対する悲しみを理論付けることにより、自身の空隙を埋めることを試みたものと考えられる。本発表では「悪魔神経症」や「喪とメランコリー」（1917 年）を基に、19 世紀初頭の文学作品における悪魔の描かれ方、悪魔と人間のこれまでの拘わり方を紐解く。その際、「フロイトの理論」のみでなく、人間フロイトにも目を向けていきたい。

２．世界の〈破れ目〉と回帰する身体―フロイトとカフカ

山尾　　涼

デカルトから始まる理性論の哲学は、キリスト教的な二項対立に基づく思考法を基盤として、精神と身体を区別して捉えた。身体は精神の道具であり、理性によってコントロール可能なものとして措定されたが、その精神の身体に対する優位性を崩れさせたのが、フロイトの意識と無意識の発見であり、これが現在の人間像の成立に多大な影響を与えている。フロイトと同時代に生きたカフカは、文学という見地から、人間の心的装置を捉えようとした作家である。「抑圧されたものの回帰」について、忘却された身体を場として描き出すカフカの視点は、フロイトが人間の心的装置を知覚可能な前景と、無意識的な後景へと分けたことと一致している。彼らは自分自身の身体を、自我にとって「もっとも疎遠なもの」、つまり他者性を秘めた客体として捉えている点で共通し

ているのである。

その際に彼らの洞察のキーワードとして挙がるのは、彼ら自身の「病んだ」身体である。彼ら自身の抱えていた「病い」は、他者性をもって主体に回帰する。いわば内在的な他者ともいえる「病い」へとまなざしを向けるとき、病んだ〈身体〉は他者および身体の洞察のツールとして、どのように機能するのか。人間の精神と身体を無定形の複合体と捉えるに至ったフロイトとカフカの思索の源を巡り、フロイトはそれをどのように証明するか、またカフカはいかに文学として描出したかを探る。

３．カフカのテクストにおける虚構の死―フロイトの「死の欲動」との関連から

須藤　勲

フロイトは第一次世界大戦という時代状況を経験することによって、「死の欲動」の理論を生み出すことになる。それは、彼がそれまでに構築してきた理論では説明できない事象に対処するためであった。カフカもフロイトと同じように戦争の時代を経験しているが、その中でも「自己保存のための戦い」としての文学活動を続けようとしていた。文学によって「内面の生」の描写を求めたカフカにとって、外部の出来事への関心は薄いものであったかもしれないが、外的な状況から自由でいられたわけではない。大戦の進行とともにカフカをとりまく状況は変化しており、またこの頃は社会的な面だけでなく、婚約とその破棄など私的な面でも彼にとって大きな変動の時期であった。そのような状況の変化がカフカの内面の変化につながり、それが彼とテクストとの関わり方の変化に現れていると推測される。特にそれはカフカのテクストにおける「死」の扱われ方に現れているように見える。

本発表では、フロイトの理論を参照しながら、カフカのテクストと「死」の関係について見ていく。ここでの死とは、作中人物の「死」であるとともに、作者によってテクストに与えられる「死」でもある。テクストにおいて「死」がどのような意味を持つのか、『判決』や『訴訟』、『失踪者』などいくつかのテクストを取り上げ、考察を行う。

４．集合的意識のアレゴリー―フロイトとベンヤミン

山本 順子

フロイトはその文化論のなかで、個人心理学から神話的原史へ遡って、深層の次元を集団に広げることによって新たな視野を得た。ブルジョア的主体の言語作用はこうして、人類史的集団身体の夢の織物へと解体されるのである。このようにフロイトが提唱した神話や夢の形成力と、ベンヤミンの集団の夢と目覚めの弁証法とを比較検証することにより、大衆社会において言語的形象が持つ力学の可能性を明らかにする。その際問題とするのは、深層の中の記憶痕跡が意識へと浮上する力学である。フロイトが分析した、圧縮や置換といった夢の材料を表現へともたらす作業は、事物を巡る詩学的な創造原理や、さらには認識論、歴史哲学の弁証法的構築と比較することができよう。

また､このことはベンヤミンのシュルレアリスム論を軸とすることによって、この一派の、検閲を極力排そうとした文学的実験手法を通して現れてきた大都市・大衆社会の神話的形成力やアレゴリー作用といった時代意識に繋げることが出来る。その比較を通して、両者の歴史把握､「幻想の未来」（フロイト）と目覚めの革命（ベンヤミン）という立場の相違が明瞭となろう。フロイトが深層心理にある夢材料に無時間という性格を付して文脈「主体」の脱構築を試みたことは、ベンヤミンの詩学においては、より大きな歴史哲学的作用を持つ関係性へともたらされているのだ。

５．Freud の精神分析―フランスにおける受容と変容

鈴木 國文

Freud の精神分析はフランスにおいて精神医学の外でこそ影響を長く残したと言うべきだろう。あるいはこう言ってもいいのかもしれない。精神分析の影響を大きく受けた人文科学が、今日もなおフランスでは精神医学を牽制することができている、と。また、フランスにおける精神医学はその黎明期から哲学の影響を強く受けている。しかし、医療の日常実践に哲学が影響を与えているかというと、そうでもない。ここでも、哲学が常に精神医学を牽制し得たという言い方が適切のように思われる。精神医学の発展の様々な段階で、他領域、特に哲学との多様な知的交流がありえたということが、フランス精神医学、およびフランス現代思想を考える上で、鍵となる点だと考えている。

Freud の精神分析がフランスにどのように導入され、その際にどのような変容を被ったかについて、両大戦間期のフランスでの精神分析受容に焦点を当て考察する。特に、1936 年に Lacan がマリエンバードで発表した『鏡像段階論』を、Freud の『ナルシシズムの導入』（1914）と対比する形で読み解くことによって、Lacan の Freud 受容の特徴を浮き彫りにしたい。この読解には、Lacan が

Freud 理論を読み解くうえでロシアからの亡命者 Alexandre Kojève から（ということは Hegel から）何を吸収したかという視点が不可欠となる。この読解を通して、Freud の精神分析というドイツ語圏起源の理論が戦後フランス思想にどのような影響を与えたかという問題に少しでも接近できればと考えている。

シンポジウム IV（14:30～17:30）　　B 会場（N1 講義室）

ヴァーグナーの舞台作品におけるドラマ性

Die Dramatizität in den Bühnenwerken Richard Wagners

司会：稲田 隆之

2013 年は音楽劇作家リヒャルト・ヴァーグナー（1813-83）の生誕 200 年にあたり、ドイツをはじめヨーロッパ各国でも多くの研究成果が発表されている。しかし研究が細分化・専門化する中で、ヴァーグナーの作品自体が等閑視される傾向もしばしば見られる。そこで本シンポジウムでは、改めてヴァーグナー研究の原点に立ち返り、具体的な分析を通じて彼の舞台作品の実相を見つめ直す。

周知の通りヴァーグナーは、言葉・音楽・身体所作・舞台美術など、音楽劇を構成する諸要素の相互連関を根源から問い直すことで、いわゆる「綜合芸術作品」を創造した。シンポジウムの表題に掲げた「ドラマ性」は、この新たな音楽劇の特徴を総体として捉えるための概念だが、そこには各要素が調和して生み出される全体性・綜合性のみならず、要素同士の衝突や要素内部の緊張に由来する複雑な亀裂が内包されており、その内実は未だ十分に解き明かされていない。

本シンポジウムではドイツ文学・演劇学・音楽学の研究者が共同して、まず「言葉と音楽」の関係性を中心に、ヴァーグナー作品のドラマ性を解明することを目指す。その際、「言葉」という概念は、歌われる台詞に加えて、ト書きや演出指示、さらにはそれらが織り上げる時空やプロットの構造をも含むものとする。さらに、ヴァーグナーが過去または同時代の「型」（形式、技法、思想、様式など）といかに対峙し、それらを受容したのかという問いを共有することで、彼の舞台作品の多面性を（一定の方向性を打ち出しつつ）照射しようとするものである。

第 1 発表者の山本は、ドイツ・ロマン主義オペラから継承されてきた「異界」がヴァーグナーの舞台作品にどのように布置され、それによってどのようなドラマ性が形づくられているのかを検証する。

第 2 発表者の松原は、初期の代表作《リエンツィ》を取り上げ、当作品が「グランド・オペラ」の「枠」とどのように対峙したのかを解明し、以降の作品で結晶化するヴァーグナー独自のドラマ性を予示していることを明らかにする。

第３発表者の岡田は、４部作の楽劇《ニーベルングの指環》のうち《ラインの黄金》を取り上げる。総譜における音楽面と演出面での指示が、相互に影響を及ぼしながら成立していったものであることを指摘する。

第４発表者の稲田は《トリスタンとイゾルデ》を取り上げ、テクスト、音楽のフレーズ構造、トリスタン和音との関連から言葉と音楽の関係を分析する。それによって、ヴァーグナーが込めた複雑な心理表現の解釈を検討する。

第５発表者の北川は最後の作品《パルジファル》を取り上げる。ヴァーグナーによる新たなドラマ性の模索の軌跡をたどり、特に言語形態に着目しながら当作品の越境的特徴について考察する。

１.「異界」の音楽表現からみるヴァーグナーのドラマ性

山本 まり子

非現実、非日常、超自然、未知なるものに傾倒したドイツ・ロマン主義オペラの伝統を受け継いだヴァーグナーの音楽劇において、常界にないこれらの要素がどのように表現されたかを、「異界」という切り口を設定することによって明らかにする。

「異界」は日常世界・日常生活の外側にある世界であり、時間的空間的に異なる領域である。舞台芸術作品において「異界」はまず場面として設定されよう。ヴァーグナーにおいて連続して置かれる２つの領域の関係は、初期作品においては明瞭な音楽的区分を舞台場面の視覚的な転換に一致させることで表現される傾向があるのに対し、音楽的連続性が顕著になると、時間的空間的越境を音楽で明示する仕掛けが施されるようになる。また、舞台上の異人・異形の者の姿が歌詞テクストでことさらに強調される場合や、登場者を「異界」の存在へと変身させる視覚的効果が活用される場合がある。

以上を本発表では、a)ヴァーグナーが時間的空間的に異なる複数の領域をどのように配置・接続しているか、b)常界の存在と「異界」の存在をいかに区別して表現しているか、c)異なる領域への移行（越境）の表現の仕掛けはどのようなものかの３点から論じ、全作品の音楽と言葉の表現から具体的に抽出・指摘する。その結果を踏まえ、ヴァーグナーがドイツ・オペラの伝統を基盤としながら、「異界」の多様な仕掛けの布置を通じて形づくったドラマ性の一端を検証する。

２．ヴァーグナーと「グランド・オペラ」―《リエンツィ》を中心に

松原　良輔

ヴァーグナー初期の代表作《リエンツィ》は、「起伏に富んだ５幕構成、スペクタクル的な視覚効果の追求、大規模なアンサンブルや合唱の重視」といった音楽的・舞台造形的な特徴を基準に考えると、当時西欧でオペラの主流をなしていた「グランド・オペラ」様式を踏襲した作品とみなしうる。しかし、この作品における「グランド・オペラ的音楽語法や舞台造形手法」と「言葉によって生み出されるドラマ性」との間には、根源的な亀裂が認められる。まず作品内における「公的世界と私的世界の関係性」に着目すると、表題役が私的な感情世界にほとんど関与しない《リエンツィ》（特にその初期稿）は、主要登場人物が公私の狭間でメロドラマ的軋轢を体験する典型的グランド・オペラとは異なる構造を示している。また、同じく作品内部における「共同体の構成原理」に目を向けると、《リエンツィ》では「ローマという理念を核とする共和国的連帯」と「貴族家門の名誉を軸とする家族的紐帯」とが対立するが、この点にも典型的なグランド・オペラ作品との差異が認められよう。本発表ではこのような論点から、《リエンツィ》が「グランド・オペラ」という規範的な「型」といかに対峙したかを解明し、この取り組みが《さまよえるオランダ人》以降の作品で結晶化するヴァーグナー独自のドラマ性を予示していることを明らかにしたい。

３．ヴァーグナーの総譜におけるオーケストラと演出指示との関係

岡田 安樹浩

ヴァーグナーの４部作《ニーベルングの指環》の台本初版（1853）は、すでに詳細な演出指示を含んでいる。そしてこの指示は、(1) 舞台の情景や舞台美術の配置、転換などに関するもの、(2) 演技者（歌手）の所作に関するもの、(3) 照明の色や明暗を指示したものに大別しうる。彼は作曲に際してその大部分を踏襲したが、総譜の段階で変更されたものや、新たに追加されたものも存在する。

従来のヴァーグナー研究では、演出指示を作品分析による解釈を補強するための手段として用いることがしばしばであったのに対して、本発表では台本と総譜の間に認められる異同に着目し、演出指示と音楽との相互関係を明らかに

する。その分析の対象となるのは、台本の成立と総譜の成立時期がもっとも近い《ラインの黄金》である。

作曲に使用された私家版台本と自筆総譜とを比較分析することができれば、両者の間での演出指示の相違は容易に抽出しうるが、自筆総譜は今日行方不明のため、異同の検証には、自筆総譜完成後の最も早い時期に作成された筆写総譜（1855）と、これを底本とした初版総譜（1873）を用いる。

この分析を通して、作者は単に台本の歌詞内容に従って音楽を付けていっただけではなく、歌手の演技所作や照明の明暗などの舞台上での出来事の具体的なイメージとともに作曲を行い、場合によっては音楽上の要請から演出指示を変更、追加することもあったことが明らかとなる。

４.《トリスタンとイゾルデ》における言葉と音楽の関係

稲田 隆之

本発表では《トリスタンとイゾルデ》（1857-59）を取り上げ、言葉と音楽がどのように緊密な関係を結びあい、それによってどのようなドラマ性を実現しているのかを明らかにする。

まず検討するのは、オペラ全体における言葉と音楽の「ねじれ関係」の実態解明である。「ねじれ関係」とは本発表者による用語で、伝統的な韻律法に基づくテクスト（＝言葉の韻文）と不規則な小節数による楽節構造（＝音楽の散文）の組み合わせ、および《指環》（1849-74）で用いられた頭韻に基づくテクスト（＝言葉の散文）と伝統的な４小節フレーズに基づく楽節構造（＝音楽の韻文）の組み合わせを指す。とりわけ、叙情的表現を担わされた脚韻を踏むテクストと音楽のフレーズ構造、および和声との関係が《トリスタン》独自の心理的な表現を実現していることを指摘する。

ここで重要な意味をもつのが、いわゆる「トリスタン和音」（f-h-dis-gis）の存在である。そもそもヴァーグナーは《指環》において言葉と音楽を結び付ける際に、言葉のアクセントを音楽の拍節に置くという極めて保守的な手法を順守する一方で、各強音節と和音構成音との間に密接な関係を構築した。《トリスタン》では、さまざまな解釈が可能なトリスタン和音が多用されていることで、言葉と音楽の間により複雑な関係が生じている。本発表ではその解釈法を検討し、ドラマ上の意味について考察する。

５．《パルジファル》における新たな舞台表現の模索 ― 言語形態を中心に

北川 千香子

《パルジファル》（1882）はモデルネへの「越境的作品」である。創作にあたり「見えない舞台」を求めた逸話が象徴するように、彼がそれまで追求してきた言葉、音楽、舞台の相互関係は変容し、新たなドラマ性が模索されている。本発表ではその模索の軌跡をたどり、主に舞台と言語の関連に着目しながら、当作品の越境的特徴について考察する。これにより、先行作品の中で試みられてきた言語そのものの生命の回復、言語に内在する音楽性や身体性の再発見、言語、音楽、身体の収斂が、《パルジファル》でさらにラジカルに推し進められ、20 世紀初頭に言語批判を牽引した作家や演劇改革者たちにつながる試みがなされていることを示す。

まず、ニーチェやフリッツ・マウトナーといった、同時代の言語懐疑者たちの論考を参照しながら、当時の言語批判的な文脈におけるヴァーグナー作品の言語形態の意義を検討する。次に、先行作品との具体的な比較分析を通じて、《パルジファル》における特性を浮き彫りにする。その一つには言語の（見かけ上の）解体が挙げられるが、さらに、叫びや呻きなどの前言語的表現や言語の不在といった、当時のオペラの慣習を逸脱する表現手段も取り入れられている。これらの具体的な分析を通して、人物の非理性や前意識を表現するために、作者の理性が駆使され、言語や身体が緻密なコントロール下に置かれているという逆説的な状況が生じていることも例示する。

シンポジウム V（14:30～17:30）　　C 会場（E310 講義室）

Sprache an medial-technischen Schwellen – Die Sprache ändert sich, aber wie?

司会：Manshu Ide

Die stilistische Ausprägung der Sprache wird bekanntlich vom einzelnen Medium beeinflusst. In den vorgesehenen Beiträgen wird mit dem „Medium“ hauptsächlich die schriftliche Realisierung der Sprache gemeint. Dabei wird die Aufmerksamkeit auf ihre Techniken, genauer auf deren Übergänge und auf die Sprache gerichtet. Zu den Techniken der schriftlichen Sprachrealisierung werden hier die Handschrift, der handwerkliche Druck, der industrielle Druck, d.h. schriftliche Massenmedien, die digitale Informationsübermittlung, d.h. auch E-Mail, Internet usw., gezählt. Diese Techniken treten real-historisch in dieser Reihenfolge auf, die neueren lösen die älteren jedoch nicht sofort nach ihrem Erscheinen ab, sondern die beiden existieren gleichzeitig, eventuell gehen sie eine neue Rollenverteilung ein. Von den oben genannten Techniken ist der handwerkliche Druck die einzige, die heute nicht mehr praktiziert wird. Innerhalb der Domäne der einzelnen Techniken können weiterhin noch präzisere Differenzierungen vorgenommen werden. So können die handschriftlichen Texte danach unterschieden werden, ob sie in Reimen verfasst sind oder in Prosa oder danach, ob den schriftlichen Texten zeichnerische bzw. fotographische Bilder beigegeben sind. Das Symposium greift sprachliche Zeugnisse auf, die auf einer medial-technischen Schwelle zu verorten sind, um ihre sprachgestalterischen Charakteristiken ans Licht zu bringen, die in anderen medial-technischen Bedingungen nicht vorkommen. Das Ziel ist, die Prozesse der sprachlichen Wandlungen vor dem Hintergrund der medial-technischen Erneuerungen zu verfolgen. Einbezogen werden konkret aus der mittelhochdeutschen Zeit die Predigttexte von Meister Eckhart in Prosa, aus der frühneuhochdeutschen der Gesetzestext der Neuen Reformation der Stadt Nürnberg, aus der neuhochdeutschen die illustrierte Zeitung in Kontrast zur normalen Zeitung und schließlich aus der Gegenwart die Texte, die unmittelbar auf PC verfasst werden. All diese Gegenstände der Analyse sind jeweils an einer medial-technischen Schwelle zu verorten, so dass die sprachlichen Charakteristiken mit dem jeweiligen technischen Medium in Zusammenhang gebracht werden können. Wir meinen jedoch nicht, dass das

Medium unmittelbar auf die Sprache verändernd wirkt, sondern mittelbar Anlässe zur Modifikation gibt, und zwar in der Art, dass sich die Sprache an die Vorgaben anpasst, die sich aus dem jeweiligen Medium ergeben.

1. **Eine Entwicklungsstufe im Ausbau des deutschen Wortbildungssystems**

Miho ISOBE

In der mittelhochdeutschen Epoche leistete die geschriebene Sprache der Mystiker einen großen Beitrag zum deutschen Wortbildungssystem, vor allem zur Abstraktabildung, worauf in der bisherigen Forschungsliteratur an einigen Stellen hingewiesen wird (z. B. Besch/Wolf 2009: 198; v. Polenz 2009: 52 ff.; Wolff 2004: 87 u. a.). Die Abstraktabildung wird sprachhistorisch auf die Sprache der Mystiker zurückgeführt. Sie werde weiter von Luther übernommen und bis ins Gegenwartsdeutsche transponiert. Die Abstrakta stellen heute ein unverzichtbares Sprachmittel dar, indem sie in verschiedenen Textsorten strukturell sowie textgestalterisch zur sprachlichen Ökonomie dienen. Es fragt sich jedoch, ob die Entwicklung der Abstraktabildung tatsächlich allein auf die sprachliche Bemühung der Mystiker zurückzuführen ist oder ob es noch andere Faktoren zu berücksichtigen gibt. In der vorliegenden Arbeit wird die These vertreten, dass die Zunahme von Textsorten vom Spätmittelalter bis zur Frühen Neuzeit die Abstraktabildung gefördert hat, wobei die Wende vom Vers zur Prosa von konstitutiver Bedeutung ist. Zur Analyse werden Predigttexte von Meister Eckhart herangezogen, um die Abstraktabildung dort sowohl morphologisch als auch stilistisch-grammatisch zu analysieren. Dadurch aufgezeigt wird ein Wortbildungssystem in mittelhochdeutschen Prosatexten im Vergleich zu Verstexten.

2. **Binnenstruktur der Nominalphrase im frühneuhochdeutschen Gesetzestext**

Manshu IDE

Das Gesetzwerk „Neue Reformation der Stadt Nürnberg" (NRN) (erlassen 1476, gedruckt 1484), das erste der Reformationsgesetzwerke, entstand im Zuge der Verschriftlichung einheimischer Gesetze zwischen 1450 und 1650. Die Bedeutung dieser neuen Gesetzwerke, die sich „Reformation" oder „Neue Reformation" nannten, ist nicht in der Übernahme

romanistisch-kanonischer Rechtssätze zu sehen, sondern in einer durchgreifenden Erneuerung der weltlichen Rechtspflege aus dem Geist des gelehrten Rechts (Kroeschell/Cordes [9]2008: 249). Textgestalterisch zeichnet sich der Text an dieser medial-technischen Schwelle durch eine kompakte Wiedergabe des Gesetzesinhaltes sowohl am Anfang des gesamten Werks als auch am Anfang jedes Artikels (Titels) aus. Das Gebot der Kürze in dieser Inhaltswiedergabe fördert m. E. den Nominalisierungsstil, der aus dem Kopfnomen, dem sich auf dieses beziehenden Genitivattribut sowie dem Präpositionalattribut bestehend einem verbalen Satz gleichkommt (z. B. *Mit der Gründung des Museums 1899 durch Friedrich Delitzsch*, TüBa-D/Z, s1907). Diese „Dreigliedrigkeit" der Nominalphrase ist erst im Reformationsgesetzwerk zu finden, wobei die formale Markierung des zweiten Attributs, das sich über dem unmittelbar vorangehenden Genitivattribut hinweg auf das Kopfnomen bezieht, noch instabil ist (z. B.: *Ersuchung des Klägers und Verantworters ihrer Advokaten*, NRN, 96=f, Z. 2-3). Diese Instabilität der Binnenstruktur lässt erkennen, dass sich die Entwicklung der dreigliedrigen Nominalphrase noch im Ausbildungsprozess befindet.

3. **Die Mikro- und Makrostruktur der ersten deutschen illustrierten Zeitung**

Hirofumi HOSOKAWA

Durch die medial-technische Entwicklung des Bilddrucks verbreiteten sich illustrierte Unterhaltungsblätter in der Mitte des 19. Jh. auch unter den Bevölkerungsschichten, die sich die Lesekultur bisher nicht zu eigen gemacht hatten. Die 1843 gegründete „Illustrirte Zeitung" (= IZ) erreichte beispielsweise schon im Vormärz eine Auflage von ca. 10.000 Exemplaren. Im Zentrum des Erkenntnisinteresses von diesem Beitrag stehen sprachliche Merkmale der IZ sowie deren Unterschiede zur Sprache der alteingesessenen Unterhaltungsblätter für gebildete Schichten, des „Morgenblatts für gebildete Leser" (= ML). Die Makrostruktur wie Bilder und Rubriken und die Mikrostruktur wie syntaktische und lexikalische Merkmale dieser Zeitungen wurden anhand vom Korpus untersucht. Bemerkenswert ist, dass der „nähesprachliche" Sprachgebrauch nach Ágel/Hennig (2006), der an den Stil des privaten Briefes erinnert, in der IZ kaum belegbar ist, während sich ein solcher Stil im ML häufig findet. Im Unterschied zum Schreiber des ML, dessen gebildete Leser sich leicht mit dem Redakteur identifizieren konnten und der Artikel wie einen privaten

Brief an den Redakteur verfassen konnte, war eine solche Identifizierung für den Schreiber der IZ, der für die Masse schreiben sollte, kaum möglich. Daher mussten Journalisten der IZ, die auf der Makroebene versuchten, sich mit der Lesbarkeit einzelner Rubriken und Illustrationen an den Leser anzunähern, auf der Mikroebene auf den „nähesprachlichen“ Sprachgebrauch verzichten. In dieser Hinsicht wird angenommen, dass die medial-technische Entwicklung, die die Unterhaltungsblätter in den Alltag der breiten Masse gebracht hat, Anlass zur sprachlichen „Distanzierung“ der Unterhaltungsblätter gegeben hat.

4. **Textwandel im digitalen Zeitalter**

Heike ORTNER

Der Beitrag beschäftigt sich mit den Auswirkungen der Digitalisierung auf Texte als linguistische Einheiten. Zum einen verändert sich durch die computergestützte Textverarbeitung der Textproduktionsprozess selbst. Technische Hilfen wie Rechtschreibprüfung und Thesaurus wirken sich dabei nicht so stark aus wie die Möglichkeit, die textthematische, textsemantische und textgrammatische Struktur sowie die Textgestalt sowohl im Mikro- als auch im Makrobereich ständig zu überarbeiten.
Im Mittelpunkt des Beitrags steht die Frage, ob und wie sich die Digitalisierung auf Textgrammatik, Textsemantik und Textpragmatik deutschsprachiger Texte auswirkt. Hier ist keine pauschale Antwort möglich, da die Effekte stark domänen-, textsorten- und plattformabhängig sind. Die Ergebnisse von zwei empirischen Untersuchungen können als Beispiele dafür dienen. Zum einen werden die Textstrukturen von journalistischen Online- und Offline-Texten verglichen. Dabei zeigen sich neben den offensichtlichen Veränderungen wie der Hypertextualität auch subtilere Unterschiede wie z.B. die stärkere Nutzung des Textstrukturmusters der „umgekehrten Pyramide“. Zum anderen werden studentische Texte verglichen, die unter verschiedenen medialen Bedingungen entstanden sind. Die Aufgabenstellung war, einmal mit der Hand und einmal mit dem Computer eine Erörterung zu verfassen. Die mit dem Computer geschriebenen Texte sind im Durchschnitt länger, grammatisch und orthographisch korrekter, kohäsiver und kohärenter. Die mit der Hand geschriebenen Texte weisen teilweise längere und komplexere Sätze auf.

口頭発表：語学（15:10～16:25）　　D 会場（E301 講義室）

司会：清水　誠，橋本　聡

1. Gesprächsanalytische Höflichkeitsforschung – Anwendung von GAT 2 in der Höflichkeitsforschung

Tatsuhiko Yoshida

Watts (2003) fordert eine empirisch orientierte Höflichkeitsforschung, in der die alltäglichen Auffassungen von Höflichkeit („Höflichkeit1“) im Fokus steht. Höflichkeit1 gehört im Rahmen der Gesprächsforschung von Deppermann (2008) zur Kategorie der „kommunikativen Ressourcen“. Interaktanten benutzten Wissen über Höflichkeit als Ressource zur Konstruktion kommunikativer Handlungen (Yoshida 2013). Um die Alltagsanwendung von Höflichkeitswissen analytisch zu betrachten, benötigt man eine Methodik, mit deren Hilfe kommunikative Handlungen gemäß einer systematisierten Konvention rekonstruiert werden können. Das Gesprächsanalytische Transkriptionssystem (GAT2) (Selting et al. 2009) bietet in dieser Hinsicht eine innovative Anwendungsmöglichkeit, solche kommunikative Alltagswirklichkeit zu rekonstruieren.

In diesem Vortrag geht es daher erstens um einen Überblick des Entwicklungsprozesses und der Prinzipien von GAT (1998 Version 1); und zweitens wie dies in der Höflichkeitsforschung sinnvoll angewendet werden kann. In einer gesprächsanalytischen Studie wird beispielhaft ein Kommunikationsausschnitt im Deutschen mithilfe von GAT2 analysiert. Durch die Analyseprozesse sowie die Resultate dieser Studie möchte ich zeigen, wie die empirische Untersuchung von Höflichkeit mittels eines GAT–Transkripts vorgenommen werden kann.

Literatur (Auszug)

Deppermann, Arnulf (2008): Gespräche Analysieren, Verlag für Sozialwissenschaften.

Selting, Margret et al. (2009): „Gesprächsanalytisches Transkriptionssystem 2 (GAT2)“, in: *Gesprächsforschung* 10, 353-402.

Watts, Richard J. (2003): Politeness, Cambridge University Press.

Yoshida, Tatsuhiko (2013): „Ethnomethodologische Analyse zur (Re)Konstruktion des Wissens von Höflichkeit im Gespräch“, *Brücke* 26, 3–32.

2. 法助動詞の時間解釈に関する独英対照―müssen, können, must, may の認識的用法を中心に

岡野 伸哉

法助動詞の意味的射程内にある命題の時間的位置づけについては、独英語間で許される解釈に差が観察される。具体的には、必然性を表す法助動詞 müssen と must の認識的用法において、前者が未来の事象を表す命題を埋め込むことを許すのに対し、後者は許さない(z.B. ok Es muss morgen regnen. vs. #It must rain tomorrow.)。本発表ではこの差を、法助動詞が指定する命題の評価時間という観点から記述すべきであることを主張する。さらに、ドイツ語の müssen, können と英語の may の認識的用法において、一見同質に見える未来解釈の可能性が、両言語で異なるメカニズムに支えられている（ドイツ語においては動作様態 Aktionsart がより大きな役割を果たす)ということも併せて主張する。

Kratzer(1976)以来、会話の背景(Redehintergrund)という概念を用いて法助動詞の多様な用法を文脈相対的なものとして捉え、法助動詞自体の意味を単義に還元するアプローチが自然言語の形式意味論の中で主流となったが、そのような手法の下で捉えられるモダリティと、他の内包的文法カテゴリーとの相互作用については、未解明の部分も多い。本発表が注目する法助動詞の時間解釈については、Condoravdi (2002), Enç (1996), Werner (2006)が主要な先行研究として挙げられるが、それらがいずれも英語についての研究であるのに対し、本発表はその知見･分析をドイツ語に応用･拡張することを試みるものである。

口頭発表：文学 3（14:30～17:05）　　E 会場（E201 講義室）

司会：鈴木 将史，北原 寛子

1.人間蒐集家の系譜―テオプラストスとエリアス・カネッティの『カラクテーレ』について

須藤 温子

カール・クラウスの影響下で培われたエリアス・カネッティ（1904-1995）の社会風刺は、「カラクター」とよばれる人物の類型学的描写となって小説『眩暈』（1935）に開花した。カネッティが小説形式を放棄した時点で、その特性描写への関心は失われたかに見える。しかし、小品として評価されなかった『耳証人　50 のカラクテーレ』（1974）や遺稿『雷光の中のパーティ』（2003）に目を向けると、それらを『眩暈』から続く人物類型の集成として再評価できるのではないか。というのも、『耳証人』は執筆当初、『カラクテーレース』の作者の名をとり『新テオプラストス』という題名であったし、カネッティが『耳証人』の続編の刊行準備もし、最晩年までカラクターの創作・蒐集に意欲的であったことは、スヴェン・ハヌシェクの遺稿研究からも明らかであるからだ。

そこで、本発表では『眩暈』から『耳証人』を経由し『雷光の中のパーティ』へといたる人間の特性描写の変遷を考察し、「カラクター」という文学ジャンルをカネッティの言語芸術における特徴の一つとして明示する。また、カラクターの描写・蒐集と、自伝にみられる記憶保持のための人物描写・蒐集との違いを確認する。そして、カネッティがテオプラストスの『カラクテーレース』やラ・ブリュイエールの『カラクテール』（1688）を意識していたことをふまえ、カラクターの特性である喜劇性やモラル的要素がどのように継承されているのかを分析する。そのうえで、「カラクター」というジャンルが衰退した 20 世紀にカネッティが『耳証人』を上梓した意義を検討する。

2.H.H.ヤーン『リチャード三世の戴冠』における認識のつまずきと痛み

北村優太

ハンス・ヘニー・ヤーンの戯曲『リチャード三世の戴冠』(Die Krönung Richards III.)は、この作者のものとしては初期に属するが、後年の他作品における重要なモチーフがすでに多く認められる重要な作品である。しかし、この作品についての先行研究には、この作品がシェイクスピアの固定させたリチャード像に対する対抗意識から書かれたものであることを作者の当時の書簡から検証した Bürger(2010)があるのみである。本発表は、これまで行なわれてこなかった作品そのもののテキストの解釈を行なう。

この作品には、登場人物が対話相手の発言をおうむ返しにし、やりとりがつっかえる箇所が非常に多く認められる。また、頻繁に言及される「仮面」や「名

前」などは、信頼できないものとして性格づけられている。本発表ではまずこれらの事柄に着目し、ヤーンの他作品との比較も補助的に用いながら、本作品での認識のありかたについて考察する。また、この作品の主要モチーフのひとつである「痛み」を認識の問題と関連づける。結果として、「仮面」や「名前」などのかたちであらかじめ与えられていた予断が退けられ、予測していなかった現実に対峙するとき、一瞬認識がつまずきを起こして「痛み」が感じられる、という構図を明らかにする。

3.クリストフ・ランスマイアー『モルブス・キタハラ』における語りの可能性

徳永 恭子

オーストリア人作家クリストフ・ランスマイアーが 1995 年に発表した小説『モルブス・キタハラ』を取り上げる。視野が狭窄し、視界が翳っていく「キタハラ病」というタイトル通り、この作品では暗黒のディストピアが描かれる。

本作品が描き出すのは、敗戦後、工業化を禁じ、ドイツを農業国化するというモーゲンソー計画が実現した仮の世界である。啓蒙の果ての野蛮への反転を起点として、文字通り文明から更なる野蛮へと転落した世界が描かれる。時は戦後のゼロ地点ではなく、マイナス地点へと遡る。また小説の舞台は強制労働キャンプがあった場を思い浮かばせるオーストリアの小村であり、このヨーロッパの辺境の村に、逃れられない牢獄として、遠く離れたブラジルの孤島の風景が重ね合わされる。

周縁としてのヨーロッパ、野蛮が支配するディストピアの場、歴史を遡った時。このような虚構性の高い文学的時空間においてこそ、過去はリアルなものとして再び立ち現れるのではないだろうか。本発表では、歴史や現実世界を参照しつつ、いかに作家が新たな時空間を文学的に創作しているかをみていく。そしてまた戦後生まれの作家が、過去の厄災を物語の舞台装置としてキッチュ化することなく描くことがいかにして可能なのかを考察する。

4.セルマ・ラーゲルレーヴ『イェスタ・ベルリングのサガ』とドイツ民族主義運動 ―グスタフ・フレンセン『イェルン・ウール』との比較

中丸 禎子

スウェーデンの作家ラーゲルレーヴは、反ナチズムおよび平和主義の立場を明確に示したことから、同時代以降の北欧と日本において、反戦平和主義作家として受容されてきた。一方、ドイツでは、郷土芸術運動および血と大地思想の展開の過程で、北欧そのものが「ゲルマン民族」の牧歌的故郷とされ、ラーゲルレーヴも理想的な「ゲルマン民族」を描く作家として賞賛された。特に、第一作『イェスタ・ベルリングのサガ』（1891）は、郷土文学の代表作である

フレンセン『イェルン・ウール』（1901）をはじめとする多くの亜流作品を生んだ。

戦後、ラーゲルレーヴは、北欧と日本では「童話作家」、ドイツでは「ナチスの御用作家」とされ、人気は保ちながらも、長らく研究対象からは外されてきた。しかし、1970年代以降のドイツにおける民族主義文学研究と、80年代以降のスウェーデンにおけるラーゲルレーヴの受容研究を受け、90年代以降のラーゲルレーヴ研究では、ドイツ民族主義における受容が指摘されている。そうした研究では、受容の原因を、ドイツ語訳における文体や筋の改変に求める傾向にある。

しかし、ラーゲルレーヴ文学の郷土モチーフや古い時代の賛美は、民族主義との本質的な共通項である。本発表では、ラーゲルレーヴの、更にはラーゲルレーヴを受容し続ける北欧、ドイツ、日本の現代社会の、ナチズムとの親縁性を明らかにすることを射程に入れ、『イェスタ・ベルリングのサガ』を『イェルン・ウール』と比較し、ラーゲルレーヴ文学が民族主義に好まれた要素と与えた影響を具体的に考察する。

ブース発表（16:00～17:30）　　F 会場（E312 講義室）

ドイツ語心態詞を含む発話における韻律的特徴について

生駒 美喜
牛山 さおり

本発表は､｢ドイツ語心態詞と日本語終助詞の発話における心的態度と韻律的特徴について」（科学研究費補助金基盤研究(C), 2012～2015 年度）におけるこれまでの成果として、ドイツ語母語話者を対象に行った心態詞を含む発話の分析結果とドイツ語学習者を対象に行った縦断的会話調査の結果を紹介する。

ドイツ語心態詞を含む発話において、心的態度により様々な韻律的特徴が見られることが先行研究で明らかになっているが、この韻律的特徴が心態詞固有の特徴か、又は心態詞の有無や種類に関係なく特定の心的態度の発話に共通した特徴であるのかは解明されていない。本研究ではドイツ語母語話者が｢反論」を表す際どの心態詞を用いるか調べ､｢反論」の発話に共通の韻律的特徴があるかを見るため音響分析を行った。その結果、複数の異なる心態詞の発話に共通の韻律的特徴が観察された。

一方、心態詞の習得には難易度に差があることが先行研究で明らかになっている。日本人学習者の心態詞習得過程は未だ解明されていないが、日本語終助詞には心態詞と似た機能があり、習得過程にも関わる可能性がある。本研究ではドイツ語学習者を対象にドイツ留学前中後における会話調査を実施し、心態詞の種類や使用頻度、その発話の変化と韻律的特徴を調べた。その結果、留学前と留学中における学習者の心態詞使用には大きな変化が見られることが明らかになった。さらに本年夏に行われる留学後の調査結果とも比較し考察を行う。

第 2 日　 9 月 29 日（日）

シンポジウム VI（10:00～13:00）　　A 会場（N2 講義室）

世紀転換期ドイツ語圏の芸術誌の諸相
―その多様性の根底にあるものは何か
Aspekte der Kunstzeitschriften in Deutschland und Österreich um die Jahrhundertwende. Worauf gründet sich ihre Mannigfaltigkeit?

司会：西川　智之

19 世紀末、ヨーロッパでは芸術誌の創刊が相次いだが、それはドイツ語圏の主要都市でも同じであった。本シンポジウムでは、ドイツ語圏の芸術誌の中から各自異なる雑誌を取り上げ、それぞれの視点から分析を加え、当時の芸術運動の多様性を明らかにすると同時に、全体討論では、そうした多様な姿を見せる当時の芸術誌の根底に何があったのかを探るつもりである。

池田と高橋は、„Dekorative Kunst“と„Deutsche Kunst und Dekoration“を取り上げる。この両誌はともに、工芸・建築・デザインなどを主な対象とする応用芸術専門誌に分類できるであろう。池田は 1910 年頃までの„Dekorative Kunst“を中心に、そして高橋は 1910 年代から 20 年代を中心に„Deutsche Kunst und Dekoration“について、「装飾」という観点から発表を行う。ユーゲント・シュティールから 1920 年代のアール・デコへと変遷していくデザインの背景にある、「装飾」についての考え方の変化を明らかにしたい。

千田と古田はそれぞれ„Simplicissimus“と„Jugend“を扱う。両誌ともミュンヘンで刊行され、当時の世相や流行を反映した大衆誌と言えるであろうが、千田は„Simplicissimus“の発行人アルベルト・ランゲンに焦点を合わせ、彼と交流のあった作家・知識人が彼を中心にどのような芸術・文化の構図を描くのか考察を加え、古田は„Jugend“の編集者ゲオルク・ヒルトのコンセプトが当時の時代のニーズにどう応え、それが商業誌媒体としてどのような具体的な形を取っていったのか、図版や文章を手がかりに分析する。

西川が取り上げるのは„Pan“と„Ver Sacrum“である。どちらの雑誌も international な総合芸術誌と呼べるであろうが、しかしその一方でフランス、イギリスに追いつこうという national な面もあわせ持っていたことを明らかにしたい。

このように各自の発表では、当時の芸術誌の多様な姿を明らかにするつもりであるが、こうした多様性は、当時の文化の担い手である市民階級の多様な関心を反映していると考えられる。19 世紀後半の市民階級の台頭によるこうした文化の大衆化は、絶対的な価値の崩壊を伴うものでもあった。しかし一方で、

シュテファン・ブロイアーが指摘するには、19 世紀後半、芸術には宗教に代わる役割が求められるようになった。それは、例えば 1902 年にウィーン分離派が行った「ベートーヴェン展」を思い浮かべてもらえば納得できるであろう。なぜ世紀転換期にこれほど多くの芸術誌が刊行されたのか、芸術誌の多様性の根底には、ブロイアーの指摘するような芸術に対するそうした期待、要請が読み取れないか、全体討論ではその点を中心に議論したい。

１.『Dekorative Kunst』誌とユーゲントシュティール
―マイアー＝グレーフェとムテジウスを中心に

池田　祐子

„Dekorative Kunst“は 1897 年に、出版人であるフーゴ・ブルックマンと美術評論家ユリウス･マイアー＝グレーフェによって､ミュンヘンで創刊された。創刊号から 3 号連続で、仏・英・独語の三カ国語で 1888-91 年に刊行された雑誌『芸術の日本』の編者であり、パリの画廊「アール・ヌーヴォー」を主催していたジークフリート・ビングの論考が巻頭を飾っていることからもわかる通り､本雑誌は欧米各国を中心とした同時代の応用芸術の動向を紹介することで、ドイツにおける応用芸術さらにはそれに係る産業の刷新を目指し、その中心にユーゲントシュティールの作品群を据えていた｡本発表の前半では､この点を、ビングとマイアー＝グレーフェの論考を通して確認する。

だが､1900 年にマイアー＝グレーフェが本誌の編集から退くのと期を一にして、本誌ではユーゲントシュティール批判の言論が見られるようになる。その代表的な論客が、当時ロンドンのドイツ大使館付技官であった建築家・建築評論家のヘルマン・ムテジウスである。しかし、ムテジウスの本誌への寄稿は、マイアー＝グレーフェからの依頼であったことが両者の書簡の内容から確認できる。そこで本発表後半では、1900 年前後のムテジウスの論考を読み解くことで、本誌における方向転換の背景を探りたい。そこから、1900 年前後のドイツの応用芸術における「装飾」に対する考え方の推移が明らかになるものと期待する。

２．„Deutsche Kunst und Dekoration“誌に現われたウィーン工房の装飾性と日本におけるその受容について

高橋　麻帆

„Deutsche Kunst und Dekoration“誌は、ドイツのダルムシュタットにおいて出版されていた芸術雑誌であり、当時のドイツ語圏では最も勢力のあった芸術誌のひとつに数えられる。そこに見られるのはブルジョワ的で「装飾的な」

傾向であり、それは今日デザインの古典となっているドイツモダニズムデザインに不可欠な「簡素性」とはややかけ離れたものである。本発表では、„Deutsche Kunst und Dekoration“に掲載されたウィーン工房の作品と記事を読み解くことにより、今まで取り上げられることの少なかったその「装飾性」に光を当てたい。初期のウィーン工房の作品には直線的で簡素な傾向が見られるが、後期になるとその傾向は曲線的で装飾的なものに変化する。曲線を駆使した代表的な作家として、今日では知名度の低いデザイナー、ヨーゼフ・マルゴルトに注目する。さらに造形のみならず、理論上でも、「装飾性」が必然と唱えられていたことを、当時の批評家が„Deutsche Kunst und Dekoration“に寄稿した文章に確認する。最後に、„Deutsche Kunst und Dekoration“が同時代の日本においても、西洋の最新の応用芸術にかんする重要資料として受容されていたことについて述べ、その「装飾的」な傾向が、実は少なからぬ影響力を持ったものであったことを指摘したい。

３．アルベルト・ランゲンと『ジンプリツィシムス』

千田　まや

1896 年、28 歳の若さで風刺雑誌『ジンプリツィシムス』を出版したアルベルト・ランゲンは、世紀転換期のミュンヘンに集う、まだ駆け出しの作家や画家たちを積極的に起用し、彼自身、作家ヴェーデキント、画家トーマス・テオドール・ハイネと共に、皇帝侮辱罪に問われて亡命を強いられたことで、赤いブルドックに象徴される反骨精神を体現した。かくして『ジンプリツィシムス』は、『ユーゲント』と並ぶ、ミュンヘンの代表的な雑誌としての地位を築いた。

しかし、出版人ランゲンの出発点が、ミュンヘンではなく、パリにあったことはあまり知られていない。そこで、本発表の前半では、Helga Abret、Ulrike Wolf-Thomsen らの研究をふまえ、パリ時代のランゲンが、ヴィリー・グレトールという詐欺師的人物を介して得た人脈（ヴェーデキント、ケーテ・コルヴィッツ等）と、ノルウェーのノーベル賞作家ビヨルンスティエルネ・ビョルンソンの娘婿としての人脈が、彼の出版事業にどう生かされたかを紹介する。彼はゾラに憧れ、雑誌を通じてのフランスとドイツの橋渡し役を目指し、亡命先にもパリを選んだ。発表後半では、国際志向であったランゲンの 1909 年の急死が、その後の雑誌の編集方針に与えた影響について考察する。

4.　雑誌『ユーゲント』の諸相—その芸術性と商業性

古田　香織

1896 年に刊行された『ユーゲント』は、世紀転換期に登場した多くの芸術雑誌の中でも、その刊行年数の長さにおいても、またその多種多様な内容面にお

いても、他の多くの芸術雑誌とは一線を画した画期的な雑誌であったと言えよう。そこには、総合芸術雑誌という冠にふさわしいあらゆるジャンルの芸術作品が登場する。たとえば、Paul Heyse、 Arthur Schnitzler、 Otto Eckmann、Richard Strauss など、文学、絵画・工芸、音楽における著名な作家・芸術家たちの作品が雑誌のいたるところにちりばめられており、芸術誌であることを否定することはできない。一方、その副タイトルが示すように、『ユーゲント』は“生活のための”雑誌でもあった。すなわち、情報提供媒体としての性格をあわせもった雑誌でもあった『ユーゲント』には、当時の社会と密接に結びつく素材を、イラストや風刺画、広告の中に多く見つけることができる。本発表では、このような『ユーゲント』の芸術性と商業性という特徴には、実は編集者ヒルトのコンセプトが大きく関わっているということに触れながら、このような２側面を持った『ユーゲント』が、世紀転換期にあってどのようなスタンスを取っていた／取り得たのかということを、具体的な図版や文章を手がかりに探ってみたい。

５．international/ national という観点から見た『パン』と『ヴェル・サクルム』

西川　智之

『パン』、『ヴェル・サクルム』の巻末の会員名簿には、ヨーロッパ各都市在住の会員名が散見され、巻末を見ただけでも、両誌とも Internationalität を強く意識していたことが伺える。

しかし、その Internationalität の根底には、芸術先進国に匹敵する芸術を自国でも育成せねばならぬという national なライバル心も流れていた。『パン』は２年目には「自国の芸術・文化により注意を向ける」という新たな編集方針を掲げ、『ヴェル・サクルム』も３年目には、月刊の「Organ」ではなく隔週の「Mitteilungen」として雑誌の性格転換を図っている。レンホーファーによれば、『パン』の national な傾向の中心人物はアルフレート・リヒトヴァルクだった。彼は創刊年の第２号で、「国内市場を守る」ためには「敵を国外へ追い出」さねばならないと、「ドイツという国で可能な芸術」の必要性を力説している。一方『ヴェル・サクルム』最終号では、他国の芸術家との交流という international な目標に触れるとともに、『ザ・ステュディオ』のような「日常的な要求」に応えるだけの多くの雑誌とは一線を画してきたと自負している。

本研究発表は『パン』、『ヴェル・サクルム』を international/ national という観点から分析し、当時のドイツ語圏の芸術運動の一側面を明らかにしたい。

シンポジウム VII（10:00～13:00）　　B 会場（N1 講義室）

グリム童話とドイツ伝承文学における父親像と母親像
Vater- und Mutterbild in Grimms Märchen und deutscher Überlieferungsliteratur

司会：野口　芳子

グリム童話は初版の第 1 巻が 1812 年に、第 2 巻が 1815 年に出版されたので、2012 から 2015 年の 3 年間はグリム童話出版 200 年祭に当たる。グリム兄弟が編集した『子供と家庭のメルヒェン集』は、世界中で聖書の次に普及した本といわれている。多くの読者を獲得したグリム童話の影響は甚大なものといえる。

グリム兄弟は 1810 年の初稿から 1857 年の決定版まで、48 年間に 8 回もテクストの改変を行った。それに対して『ドイツ伝説集』の方は 1 度も改変せず、伝承をそのまま収めたとされている。一方、民謡集『少年の魔法の角笛』はアルニムやブレンターノの提案で収集されたので、ロマン派文学色が色濃く出たものといわれている。出版の動機が異なるこれらの伝承文学のなかには、語り手が所属していた昔の社会の父親や母親が出現していると思われる。それとも改変された童話集には、編者の属する近代の父母像が出現しているのだろうか。伝説集や民謡集と比較することによって、童話集に登場する父母像が、ザイプスやボッティックハイマーが主張するように、近代のビュルガーの価値観に合わせて書き換えられたものか否かについて検証していく。

伝承文学が個人の文学作品と異なる点は、多くの人々に担われてきたということである。そこには担い手が所属する社会規範が反映している。このシンポジウムでは、グリム兄弟が収集したメルヒェン、伝説、民謡を取り上げて、そのなかに登場する父母像について、さらにドイツ現代伝説に出現する父母像について考察する。

発表 1（溝井裕一）では、「ハーメルンの笛吹き男」伝説を取り上げ、子どもの失踪を嘆く人物が、母親から父親に変えられていく過程を検証しながら、家族像の変遷について考察する。発表 2（竹原威滋）では、各地に流布する「灰かぶり」の異型に注目し、民族や社会の相違により、父母像がどのように異なるのかを見ていく。発表 3（山本まり子）では、『少年の魔法の角笛』の 130 曲の詩を分析し、父母と子どもの関係に焦点を当てながら、作曲当時の社会を浮かび上がらせる。発表 4（金城ハウプトマン朱美）では、ドイツ語圏現代伝説に登場する父母像を分析することによって、現代ドイツが抱える家族問題について考察する。発表 5（野口芳子）では、グリム童話 211 話全体を調査し、そのなかに登場する父親や母親はどのような存在なのか考察する。ここでは個々のメルヒェンを取り上げたケーススタディーではなく、包括的見解を提示する。

伝承文学のなかの父母像は近代家族の父母像より厳格で残酷である。この現象は個人的事項というより、社会的事項として把握しすべきであろう。このシ

ンポジウムでは、その理由を文学や心理学だけでなく、社会学、歴史学、法学、などの観点から学際的に考察する。同時に、母性愛や父性愛が時代によって社会によって変遷するもの、すなわち「ジェンダー」であることも証明していく。

1．ハーメルンの笛吹き男伝説の場合

溝井　裕一

本発表では、「ハーメルンの笛吹き男伝説」における父親像と母親像をとりあげ、その変遷を社会史・文化史的に論じていく。

グリム伝説集（1816）の「ハーメルンの子どもたち」では、子どもたちが失踪したとき、両親たちが行方をさがし、嘆き悲しんだと語られている。しかし、こうした親のイメージが、時代とともに変化してきたことは、阿部謹也をはじめとする先行研究において指摘されていない。

16 世紀半ばまでの資料では、子どもたちを探して駆けずりまわったのは母親たちであるとされていた。だが、それ以降の資料では、両親が捜索したとされている。しかもとくに父親が、常に子どもを見張っているべきだと語られた。この背景には、近世における家父長意識の浸透があると考えられる。

また「笛吹き男伝説」における両親と子どもの関係も問題となる。ロステク＝リューマンは、この伝説が、邪魔な子どもはいなくなってほしいという、親の隠れた願望が結晶化したものだと主張している。しかし中世や近世の子どもは、親を貧困に陥れかねない一方で、労働力や婚資をもたらす貴重な財産でもあったので、その失踪は多大な損失を意味した。「結婚適齢期だった市長の娘」まで失踪したとする 1577 年の記述は、この文脈においてとらえられなければならない。

このほか、中世や近世のマリア信仰や歴史観の問題も勘案しながら、この伝説における父親像と母親像について多面的考察をおこなう。

2.『灰かぶり・千枚皮』の場合 ―東西の民間説話を巡って ―

竹原　威滋

グリム童話かあ『灰かぶり・千枚皮』はヨーロッパではシンデレラ譚としてバジーレ、ペロー、ジェイコブスの説話集でも取り上げられ、最古の文献としては唐時代の『酉陽雑俎』が挙げられる。シンデレラ譚は、国際的な民話の分類によると、次のような２つの話型に分類される。「灰かぶり」型は、自分の家で連れ子をしてきた継母にいじめられ、舞踏会で王子に見初められ、逃げるが、靴合わせで見いだされ、結婚する。「千枚皮」型は、かぶりものを被り、他人の家に女中奉公し、舞踏会で奉公先の王子に気に入られ、アクセサリーをもらうが、逃げて帰る。恋煩いに陥った王子にアクセサリーの入ったスープを差し出し、王子に見いだされ、結婚する。

本発表では、シンデレラ譚のヨーロッパ、アジアの類話を比較することによ

って地域または時代による男性と女性の役割、父親像や母親像がどのように変遷しているかを考察する。グリム以前の口承の説話には過酷な境遇から自らの運命を切り開く主人公もいるが、グリム以降の近代の民間伝承では、「幸せに恵まれない美女が逆境に耐え、やがて富と力のある男に見いだされ、玉の輿に乗る」というステレオタイプ化したシンデレラ物語に仕立て上げられた。これを見ても近代以前と近代の結婚観が民間伝承に反映していることがわかるであろう。特に話の冒頭に登場する母の病死後の父の再婚や娘への求婚のモティーフの中に家族像やジェンダー観を解く鍵が潜んでいる。

3.『少年の魔法の角笛』に基づく音楽作品の場合

山本　まり子

『少年の魔法の角笛』（以下『角笛』）は、アルニムとブレンターノが民間伝承されていた民謡の歌詞の部分を収集編纂したテクスト集であり、当時歌われていた節（ふし）は採譜されていない。学術研究の対象としての口承民謡の再現の動きとはまったく異なる脈絡において、19～20 世紀にかけて『角笛』を素材とした芸術音楽が創作された。ヴェーバー、メンデルスゾーン、ブラームス、フンパーディンク、マーラー、R. シュトラウスといったドイツ・ロマン主義音楽を代表する作曲家が『角笛』を取り上げている。

本発表では、130 曲余に使用された『角笛』の詩の傾向を分類したうえで、家族関係が表現されているものに関して、父親、母親、子の関係を具体的に提示し、音楽的側面にそれがどのように反映しているか考察する。それにより、『角笛』で描かれた家族像を、文学とは異なる文化的視座で捉え直したい。

『角笛』の詩の全体的傾向としては森林、狩猟、旅、男女の愛といった日常生活に密着した主題が多い。しかし、多くの作曲家から「子守唄」が好まれ、また、マーラーの歌曲「浮世の生活」のように、子どもと母親の会話を通じて貧困社会をあぶりだす作品が作られたことから、音楽作品には作曲当時の『角笛』の受容層や社会的影響力が考慮されていたと考えられよう。『角笛』を題材とする音楽諸作品は作曲年代に幅があることから、家族像の多様な形とともに音楽的処理の変遷と多様性にも言及する。

4. ドイツ語圏の現代伝説の場合

金城ハウプトマン　朱美

現代ドイツでは家族のあり方が多様化し、同時に父親と母親の役割も変化している。例えば、仕事や家事、育児もする「新しい父親」が登場し評価されているが、一方ではキャリア志向の母親が「鴉の母親（Rabenmutter)」と批判されている。このような現状を考慮すると父親像や母親像も当然時代と共に変化していると考えられる。ここで欧米の研究者からは時代を反映する鏡のような役割を果たすといわれ、ドイツ語圏では「現代のメルヒェン」とも呼ばれてい

る現代伝説に注目してみると、そこには現代ドイツのジェンダー観が如実に現れていると思われる。

ドイツ語圏現代伝説とジェンダーに注目した先行研究はなく、ブレードニヒ編纂現代伝説集における男女像についての拙論(2011）の分析結果があるのみである。本発表ではその分析結果をより具体的な研究に発展させるために、研究対象を父親と母親に絞り込むことにする。両者の特徴を抽出し、今日の日常生活を舞台にした語りである現代伝説における父親と母親について分析し考察する。ここで明らかにされた父親像と母親像は、現代ドイツにおける父母像を浮き彫りにしているといえるのか。またそれは、実際に現代ドイツが抱える家族問題をどの程度反映しているのか。それらの問題について、民俗学、家族社会学、メディア学、ジェンダー学の視点から考察していく。

資料としては、ブレードニヒ編纂現代伝説集等ドイツ語圏で書承化された現代伝説集を扱う。

5．グリム童話全体における父親像と母親像

野口　芳子

グリム童話集に登場する父親や母親についてはこれまで､｢ガチョウ番の女の子」や「ホレばあさん」における母娘関係、「蛙の王様」における父娘関係のように個々の話についての研究が行われてきた｡そのうえシャーフマン､レレケ、ガイガーなどの先行研究はいずれも文学的心理学的考察に終始している。

この発表では先行研究ではなされてこなかった、グリム童話全体を調査の対象とした包括的研究を試みる。グリム童話全 211 話に出現する父親像と母親像を調査してから包括的特徴を抽出し、近代家族における父親像と母親像との相違点を明らかにしていく。また､そのような相違が生じる理由を､｢家族」を「社会的単位」として捉える社会学的アプローチによって探っていく。

中世家族と近代家族の相違を歴史的社会的に解明してから父親像や母親像を考察していくという手法は、文学や心理学だけでなく、歴史学、社会学、法学、ジェンダー学の視点から学際的考察を加えることを意味する。

子どもを売ったり、譲ったり、殺したりする父親や母親、結婚相手に法外な難題を課す父親、子どもを動物に変身させる母親などが出現するのは一体何故なのか、その理由を探っていく。さらに息子より娘の誕生を願う父王の存在についても、歴史学、法学の視点から考察していきたい。

現代における父母像と比較することによって、母性愛や父性愛が時代や社会によって変遷するものであることを明らかにしていく。

シンポジウム VIII（10:00～13:00）　　C 会場（E310 講義室）

Linguistische Sprachphilosophie: Auseinandersetzung mit Sprache aus Sicht der Linguistik

司会：Shin Tanaka

Zu Sprache haben alle etwas zu sagen. Wenn z.B. die Rechtschreibung reformiert werden soll, melden sich nicht nur Sprachwissenschaftler oder Schriftsteller zu Worte, die direkt mit der Sprache zu tun haben, sondern es werden praktisch von allen Ecken der Gesellschaft Stimmen dazu laut. So möchten wir uns in unserem Symposium mit einem Thema befassen, das alle Mitglieder der JGG angehen. Wir stellen dabei verschiedene linguistische Positionen vor, von denen aus die Sprache angegangen werden. Dabei sollte die Position der Linguisitk gegenüber der von Sprachphilosophie betont werden: „Die Geschichte der Linguistik ist im Grunde die Geschichte der zunehmenden Einsicht in das reiche Funktionspotential von Sprache. Die Geschichte der Sprachphilosophie stellt dagegen die Geschichte der zunehmenden Abwertung von Sprache da.“ (Leiss 2009: 1)

Während die Philosophen mit dem Fortschreiten der Zeit immer mehr zur Ansicht gelangen, dass die Sprache unvollkommen sei und somit unbedingt therapiert werden müsste, sind die Linguisten immer wieder fasziniert von der Leistungsfähigkeit und Komplexität von Sprache. Wir werden versuchen, auf fundiertem Wissen über Sprache deren gerechte Behandlung zurückzugewinnen.

Ausgangspunkt unserer Auseinandersetzung mit der Sprachphilosophie werden Modellierungen des Verhältnisses zwischen Sprache, Denken und Welt sein: Wir möchten sehen, wer bzw. welche linguistisch-philosophische Schule welche axiomatische Konstellationen von Sprache, Denken und Welt vertritt, eine Methode, die in Leiss (2009) erfolgreich angewendet wird.

Im Symposium werden nach dem einleitenden Vortrag von Leiss drei weitere Beiträge vorgesehen, die sich weiter mit dem Konzept "Universalgrammatik" beschäftigen. Das Symposiums wird folgendermaßen aufgebaut:

1. Leiss (allgemeine Konzeptvorstellung, Sprachphilosophie und Universalgrammatik)

Leiss führt in ihrem einleitenden Vortrag die Schlüsselkonzeption des Symposiums ein, um die es in den darauffolgenden Beiträgen mehr oder

weniger geht: die Nicht-Cartesische Universalgrammatik. Dabei werden verschiedene Ansätze zur sprachlichen Reflexion miteinander verglichen, wobei sie in Bezug auf das Verhältnis zwischen Sprache, Denken und Welt unterschiedliche Positionen vertreten.

2. Nishiwaki (Uncartesianische Reflexion über Sprache aus japanologischer Sicht)

Nishiwaki führt die Diskussion der Nicht-Cartesischen Linguistik weiter, indem sie einen Vergleich mit einer Auffasung der japanischen Linguistik, Tokieda-Grammatik, anstellt.

3. Muroi (Potentiale einer kommunikativ orientierten Spachphilosophie)

Muroi setzt sich mit den Ansätzen der Universalgrammatik auseinander und stellt eine Überlegung an, Humboldts These der kommunikativen Funktion der Sprache in die Diskussion zur Universalgrammatik zu integrieren.

4. Yoshida (Universalgrammatik als Schnittstelle zwischen der syntaktischen Strukturbildung und der situationsgesteuerten Erkenntnisbildung)

Yoshida setzt sich mit dem Gegenpol der "Nicht-Cartesischen Linguistik", der "Cartesischen Linguistik", näher auseinander und bringt eine alternative Auffassung der sprachlichen Universalität zur Debatte.

Leiss, Elisabeth (2009): Sprachphilosophie. de Gruyter Studienbuch. Walter de Gruyter.

1. Die Modellierung des Verhältnisses von Sprache, Denken und Wirklichkeit in Philosophie und Linguistik

Elisabeth Leiss

Zu Beginn des Vortrags werden die unterschiedlichen Möglichkeiten, die Relationen zwischen Sprache, Denken und Wirklichkeit zu modellieren, vorgestellt. Anschließend werden zwei Möglichkeiten, eine Universalgrammatik zu entwickeln, skizziert: die cartesianische Universalgrammatik, wie sie im 17. Jahrhundert entworfen und von Noam Chomsky popularisiert wurde, und die nicht-cartesianische Universalgrammatik des 13. und 14. Jahrhunderts, auf die sich Roman Jakobson bezogen hat. Während die cartesianische Variante überwiegend formal orientiert ist, weil Inhalte als wesentlich nichtsprachlicher Natur

und als Denkinhalte verstanden werden, die lediglich einen sprachlichen Ausdruck brauchen, ist die nicht-cartesianische Universalgrammatik funktional orientiert. Rationales Denken wird in der scholastischen Sprachtheorie der Modisten nämlich mit Hilfe des Instruments Sprache erst möglich. Aus diesem Grund ist die nicht-cartesianische Variante einer Universalgrammatik nicht ausschließlich formal orientiert, sondern sowohl formal als auch funktional ausgerichtet. Formalismus und Funktionalismus schließen sich hier nicht prinzipiell aus. In formaler Hinsicht werden alle Sprachdomänen (Phonologie, lexikalische Semantik, grammatische Funktionen) durch eine Logik der Teil-Ganzes-Relationen (Mereologie) formatiert. Alle drei Bereiche sind formal nach universalen Gesetzmäßigkeiten organisiert. Voneinander differenzierbar sind sie durch ihre Funktionen, die nicht miteinander vermischt werden können. So kann zum Beispiel unregelmäßiges Material im Bereich der Grammatik nicht in den Bereich des Lexikons verschoben werden, da Grammatik und Lexikon in funktionaler Hinsicht unterschieden und damit inkompatibel sind. Neben den Anfängen einer funktional orientierten Sprachauffassung werden im Vortrag die im cartesianischen Zeitalter überlebenden älteren Auffassungen des Zusammenhangs von Sprache, Denken und Wirklichkeit, wie sie von Hamann, Herder und Wilhelm von Humboldt tradiert und weitergedacht wurden, angesprochen. Es ist nicht ausgeschlossen, dass die scholastischen Ansätze von Rationalismus, wie sie sich in den Architekturen der Universalgrammatiken und der zeitgleich entstehenden gotischen Kathedralen finden, den japanischen Traditionen, Sprache, Denken und Wirklichkeit zu konfigurieren, weit näher stehen als die Reduktionen des cartesianischen Rationalismus in Europa.

2. Uncartesianische Reflexion über Sprache aus japanologischer Sicht

Maiko Nishiwaki

Die sprachtheoretische Grundposition, dass eine funktionale Trennung zwischen Lexikon und Grammatik vorgenommen soll, wird in der heutigen Linguistik vor allem in Leiss' (2009/2012) „Sprachphilosophie" vertreten. Die Autorin konzipiert dadurch ein neues Format einer Universalgrammatik. Dies unterscheidet sich vom cartesianischen Ansatz zur Universalgrammatik darin, dass in der cartesianischen Auffassung die Sprache als Instrument des Ausdrucks von Gedanken betrachtet wird,

während die nichtcartesianische Linguistik die Formatierung unserer Gedanken durch Sprache voraussetzt.

Lexikon und Grammatik sind häufig in einer Form fusioniert. Bei Grammatikalisierungsprozessen passiert das Aufbrechen der formalen Fusion. Es handelt sich dabei nicht um semantisches Ausbleichen eines Lexems, sondern um die Extrahierung eines die Sprecherorigo einbeziehenden Elements aus dem Lexem (Leiss 2011).

Im Hinblick auf die Japanologie ist der Ansatz der Trennung von Lexikon und Grammatik eine Tradition, die sich bis ins 12. Jh. zurückverfolgen lässt, deren Höhepunkt sich jedoch erst bei Tokieda (1941) findet. Bei ihm entspricht „shi“ und „ji“ jeweils den lexikalischen sowie grammatischen Elementen. Der Wechsel von „shi“ zu „ji“ stellt keine kontinuierlichen Prozesse dar, sondern ein Kippen vom einen zum anderen.

Ziel meines Beitrags ist es, die Parallelität zwischen der nichtcartesianischen Auffassung und der von Tokieda herauszuarbeiten und eine neue Möglichkeit der Grammatikalisierungsforschung aus den beiden Positionen zu erörtern.

3. Potentiale einer kommunikativ orientierten Sprachphilosophie

Yoshiyuki Muroi

In der Sprachphilosophie wird auf die kommunikative Seite der Sprache wenig Aufmerksamkeit gerichtet. Humboldt stellt dabei eine der wenigen Ausnahme dar, Begriffe sind für ihn keine festgelegten Produkte, sondern werden jeweils in der Kommunikationssituation hervorgebracht. Außerdem behauptet er, dass das Sprechen für das Denken unentbehrlich und es für den Menschen notwendig ist, die Verständlichkeit seiner Sprache an anderen Menschen zu prüfen, um sich selbst zu verstehen.

Auf der anderen Seite verbreitet sich in der gegenwärtigen Semantikforschung die Überzeugung, dass mit der Kommunikation eng verbundene Faktoren wie Modalität und Evidentialität für den Satzbau eine wesentliche Rolle spielen. Die Pragmatik stellt fest, dass der propositionale Inhalt der Äußerung erst durch Einbeziehung von den kontextualen und situativen Informationen bestimmt wird. Auch die semantischen Beiträge der lexikalischen Einheiten müssen im Zusammenspiel vom Lexikon, der Kognition und der Welt (Die Äußerung wird auch an der Welt geprüft) erörtert werden.

Wenn man diese Ergebnisse in Sinne von Humboldt betrachtet, wird ein neues Licht auf die Funktion der Sprache geworfen: Die Sprache stellt sich nicht mit ihrem festgelegten Semantiksystem als Erkenntnismittel zur Verfügung, sondern die Erkenntnis kommt durch kommunikatives Suchen nach einer adäquaten Lösung zustande, in dem sich das Subjekt aus verschiedenen Perspektiven mit der Welt auseinandersetzt.

4. Universalgrammatik als Schnittstelle zwischen der syntaktischen Strukturbildung und der situationsgesteuerten Erkenntnisbildung

Mitsunobu Yoshida

Eine einzigartige Eigenschaft der Sprache liegt darin, aus dem endlichen lexikalischen Inventar neue syntaktische Strukturformen zu bilden und rekursiv unendliche Sätze zu erzeugen, was Chomsky als Generative Grammatik charakterisiert und sie an die Tradition der „Cartesianischen Linguistik“ angeschlossen hat. Dieser Grammatik liegt eine dem Menschen angeborene Fähigkeit zugrunde, die er als Universalgrammatik bezeichnet. Dieses Referat unterstützt Chomskys Grundidee, macht aber zugleich auf eine konzeptuelle Verankerung der universalgrammatischen Fundierung als Desiderat aufmerksam.

Man kann die Entstehung der Sprache nicht aus Kommunikation an sich ableiten: Fast alle Tiere kommunizieren mittels verschiedener Signale miteinander wie z.B. Meerkatzen Affen. Sie können jedoch ihre Zeichen nicht kombinatorisch benutzen, um ihnen neue Bedeutungen zuzuweisen, d.h. sie kennen keine Syntax. „Cartesianisch“ konzipierte Linguistik kann die Kreativität der Sprache nicht vollständig erklären, weil syntaktische Fähigkeiten ohne Zusammenhang mit phylogenetischen Entwicklungsprozessen isoliert betrachtet werden. Um der biologischen Evolution und der kognitiven Entwicklung der Sprache gerecht zu werden, muss man eine neue Universalgrammatik modellieren, die sowohl ihre formale Eigenschaft als Prinzip der Strukturbildung als auch ihre semantisch-pragmatische Eigenschaft als Prozess der situationsgesteuerten Selbst- und Fremderkenntnis, somit propositionale Urteile der gegenständlichen Umwelt umfasst. Diese wechselseitige Betrachtungsweise könnte erst die unergiebige Dichotomie zwischen „Subjekt und Objekt“ aufheben. Dieses Referat versucht Vor- und Nachteile von Cartesianischer und Nicht-Cartenisianischer Linguistik deutlich zu machen.

口頭発表：文学 4（10:00～11:55）　　D 会場（E301 講義室）

司会：梅津　真，副島 美由紀

1. 中世低地ドイツ語における擬人化された動物表現
―手稿本『シヒトブーフ』を手掛かりに

小沼 和子

1510 年から 1514 年にかけて中世低地ドイツ語で記述された『シヒトブーフ』は北ドイツのハンザ都市、ブラウンシュヴァイクの叙述家、ヘルマン・ボーテの手によるものだと推定されている。彼は徴税書記であったが同時に詩人でもあり、年代記編纂者という側面も持っていた。またシヒトとは中世低地ドイツ語で出来事、事件、一揆の意味であり、『シヒトブーフ』には 1293 年から 1514 年にかけてブラウンシュヴァイクで起こった暴動の様子がおさめられている。これは 7 編から構成されているが、そのうちの 2 編の暴動においては筆者自身が暴動の渦中にあり、命を落とすような危険にも晒されている。

この手稿本について特に着目すべき点は、各々の暴動の性格付けが挿絵を伴った動物によってなされていることである。これが編纂された 16 世紀初頭は、手稿本から印刷本への過渡期にあたり、手書きの書き物と印刷物が混在していた時期であった。伝達という行為を補完する役割を担っていたのが、手稿本の挿絵や印刷本の版画である。

この手稿本は史料として部分的に用いられることはあったが、構成の複雑さ、文学作品としての不完全さから、全体を包括的に研究されることはなかった。

本発表においては、この作品中に多数用いられている動物を用いた表現を、従来のそれと比較することで、著者がどのような意図を持って手稿本にこれらの挿絵を付したのか、手稿本の叙述内容と他の歴史的史料を用いつつ明らかにすることを試みる。

2.トレフリツェントの中立の天使論と誤りの告白
―『パルチヴァール』における誠〈triuwe〉の一側面

松原　文

20 世紀前半まで『パルチヴァール』研究は、文献学的探究や主人公を軸とした作品全体の解釈、聖杯世界を主な対象とした神学的解釈に重心をおいていた。この動向は 1960 年代頃より変化を見せ、近年は語り手（ヴォルフラム）の立ち位置や受容者への視線、語りの複雑性、筋の多義性に注目する研究が数多く生まれている。

隠者トレフリツェントは甥パルチヴァールに、犯した罪や聖杯の由来、神と天使について教える（第 9 巻）。だが物語の末部で聖杯王となった甥と再会し

た時、かつて自分は聖杯を天から地にもたらした中立の天使の運命について誤りを言った、と告白する（第 16 巻）。

聖杯に関わる情報が訂正され、heilec と評された人物の権威が覆されるこの混乱の場面は解釈の困難な箇所の一つであり、研究の流れに呼応して様々な解釈がなされてきた。昨今のいくつかの研究は、絶対的なものは存在せず多義的だ、というプロローグで主張された作品世界観や、弓の喩えで示された特有の語りの技法と関連づけて両場面を考察した。価値ある見解だが、複雑なものをあるモデルに当てはめ、それ以上の追究から手を退くこの姿勢こそ、ヴォルフラムが誠実（triuwe）でないと戒めたものだとも言える。本研究は作品の主題と言われ、また第 9 巻で密に用いられた語 triuwe に着目する。そして誹りを覚悟しつつ、トレフリツェントの振る舞いとプロローグにある賢者と誠に関する記述を対置し、triuwe の一側面を明らかにしたい。

3. トーマス・マン『選ばれし人』の語りの手法について
―「読者に与える効果」という観点から

及川 晃希

トーマス・マンは、晩年の作品『選ばれし人』(1951)において、「物語の精神(der Geist der Erzählung)」という全知の語り手に物語らせるという手法を用いている。『選ばれし人』は、ハルトマン・フォン・アウエの『グレゴリウス』(1195 年頃)を基にした作品だが、この作品の主題と言える「罪と恩寵」の問題と並んで、早い段階から、「物語の精神」という語り手のあり方にも多くの研究者の関心が向けられてきた。たとえば、Adorno(1954)にこの作品の語り手についての言及がみられるし、Kayser(1956)、北島(1981)、尾方(1999, 2001)などがこの問題について扱っている。

「物語の精神」という語り手は、別々の場所で出来事が同時進行するという物語内容の要請によるものであると同時に、前作『ファウストゥス博士』(1947)の語り手ツァイトブロームの視点の制限に対して困難を感じていたマンにとっては、最も無制限の語り手の採用という一種の反動でもあった。

20 世紀は、様々な語りの方法が試みられた時代であり、『ワイマルのロッテ』(1939)で「内的独白」の手法を取り入れるなど、そうした時代の動向にマンも全くの無縁ではなかったが、先鋭化しすぎた実験的手法は読者を置き去りにする危険も伴う。伝統的な語りの手法への回帰とも言える「物語の精神」は、執筆中の作品を家族や親しい友人たちに向けて朗読し、常に「読者に与える効果」を確かめながら作品を書いたマンの晩年における一つの到達点でもある。

口頭発表：文化・社会（10:00～12:35）　　E 会場（E201 講義室）

司会：高橋 吉文，瀬川 修二

1. 群集演出の観点から見たティング劇上演

杉浦　康則

ティング劇研究においてはその作品分析や上演活動の展開の描写に加え、このナチスによる活動がごく短期間で終焉を向かえたということもあり、とりわけ活動停止の原因が追及され、党内部でのローゼンベルク派とゲッベルス派との対立がその原因の一つとされている。しかし、プロパガンダとしてのティング劇上演の観客への作用を捉えようとするのであれば、演出理念や上演に対する批評を確認することが必要だろう。ティング劇上演の観客への作用を捉えるために、演出理念及び上演に対する批評を確認する中で、この活動の指導部のみならず批評家によっても、上演を成功させる要因として大群集の行進、合唱隊の運動が注目されていたことが見出される。このような上演形態は KPD のシュプレヒコールやロシア群集演出などの形態を引き継ぐものとして、ティング劇研究において言及されてきた。ところがこれらの活動に先立ち同様の形態の上演を行い、演劇史において群集演出の観点から論じられるマックス・ラインハルトがティング劇研究において名指しで挙げられることはあまりなく、挙げられてもその影響が強調されることはない。政治的理念とは関わりのないラインハルトの群集演出とその後の演出との間に境界線を引くのではなく、むしろラインハルトからの影響の大きさを強調することによって、ヨーロッパ演劇における群集演出の新たな展開が見出される。

2. アルザスの啓蒙プロジェクト

今村 武

本発表は、18 世紀後半にドイツ語圏に興る文学、シュトゥルム・ウント・ドラングを代表する詩人、ヤーコプ・ミヒャエル・ラインホールト・レンツのアルザス滞在時代の活動を考察する。戯曲を中心とする執筆活動とあわせて、特に雑誌編集活動に焦点を当てる。シュトラスブルクで編集発行したドイツ語定期刊行誌「市民の友」を、啓蒙をキーワードとするドイツ語圏文化史の視点から評価する。

本発表の提示するテーゼは第一に、疾風怒濤の発信地の一つシュトラスブルクは、定期刊行物が刊行された啓蒙の発信地として考察されるべきである。シュトゥルム・ウント・ドラングと密接に関連する定期的刊行物「市民の友」の

発行地は、他の啓蒙諸都市と比較考察される必要がある。

第二に、定期刊行物を中心とするアルザスの啓蒙は、レンツの主導のもとに成立したドイツ協会の諸活動、とりわけドイツ語純化運動、さらに教育論等の多様な観点から明らかにされるべきである。さらに地理的に近いスイスとの関係から、教育の改善と普及に関する活動を啓蒙の一つとして評価する。

第三に、アルザスの疾風怒濤はゲーテ、レンツらの参加したサークルの主導者ザルツマンの活動に遡って評価する必要がある。スイス・チューリヒの疾風怒濤の例があるように、その土壌を育んだザルツマンの活動も含めて考察することなくして、シュトラスブルクにおける疾風怒濤と啓蒙の成立と経過を評価することは出来ない。

3. ユダヤ・ナショナルの自衛―『自衛―独立ユダヤ週刊新聞』

中村　寿

『自衛―独立ユダヤ週刊新聞（Selbstwehr Unabhängige jüdische Wochenschrift）』は、1907 年３月、オーストリア帝国ボヘミア王国のプラハで創刊され、ボヘミア王国、その後のチェコスロヴァキア共和国に在住するドイツ系ユダヤ人を主たる読者対象として、1938 年まで継続的に発行されたユダヤ・シオニズム系の週刊新聞である。

ドイツ文学史記述において、『自衛』は、カフカの『律法の門前（Vor dem Gesetz）』(Selbstwehr. 9 Jahrgang, 1915, Nr. 34. 7. September）を初出掲載した雑誌として知られていた。『自衛』をめぐる研究状況としては、近年のドイツでは、ユダヤ系定期刊行物のデジタルアーカイブ化(www.compactmemory.de.）が進められつつあり、同じシオニズム系新聞の『世界（Die Welt）』、あるいは、ユダヤ・リベラル系の諸雑誌との対照により、シオニズム系新聞としての『自衛』の特徴を検討する作業が可能になっている。

『自衛』の創刊号において、その執筆者フランツ・シュタイナー（Franz Steiner 1857-1942）は、綱領として、「ユダヤ教におけるありとあらゆる脆さと中途半端さ、腐敗に対する抗議と宣戦布告」(SW. 1, 1907, Nr. 1. 1. März）を挙げている。このような語句から読み取られるのは、伝統的なユダヤ教に対する抗議・批判というユダヤ・ナショナルの姿勢である。本発表では、ユダヤ人同胞によるシオニズム批判に対するユダヤ・ナショナルの「自衛」という観点から、ユダヤの自己同一性をめぐるユダヤ教の世論の内部における『自衛』の位置・役割について言及したい。

4. 高村光太郎の美術批評「緑色の太陽」におけるドイツ語使用をめぐって

野村 優子

雑誌『スバル』の 1910 年 4 月号に掲載された高村光太郎の「緑色の太陽」は、大正期に台頭する主観主義芸術を予告した美術批評として名高い。米英仏に三年間留学した直後に書かれたこの文章の中で、高村は「PERSOENLICHKEIT」や「GEFUEHL」などドイツ語単語を多用している。ドイツ文化と関わりを持たず、むしろフランス文化の受容者であった高村が、ここにドイツ語を採用したということは、当時の芸術観や西洋文化受容を探るうえで重要な手がかりになるにもかかわらず、従来の研究において未だ明確な解説は与えられていない。

発表者は、「緑色の太陽」の着想源がフランスの画家アンリ・マチスの画論にありながら、本文にはドイツ語が用いられている矛盾を指摘し、この文章がフランス語を解した美術家にではなく、ドイツ美学を拠り所として芸術論を展開した文学・思想界の人々に宛てられていることを証明する。また、日本にいち早くゴーギャンを紹介した高村が、その際に参照した本はドイツ人美術史家ユリウス・マイヤー・グレーフェ（Julius Meier-Graefe, 1867-1935）の著書『Entwicklungsgeschichte der modernen Kunst』（1906）の英訳であったことに目を向け、一般に、『白樺』を介して行われたとされる日本のポスト印象主義受容が、実は精神面においてドイツ美術思想を踏襲していたという事実を明らかにし、近代日本洋画史のねじれと西洋文化受容の重層的様相を示したい。

ブース発表（11:30～13:00）　　F 会場（E312 講義室）

データベースソフトウェアを活用したドイツ語教材の可能性と実践例

齊藤 公輔
田原 憲和
池谷 尚美
神谷 健一

本発表で紹介するデータベースソフトウェアを用いたドイツ語教材(以下ツール)は、教材提示のためのスライド提示型(デジタルフラッシュ型)教材であり、基本・基礎知識の定着に対して一定の評価を得ている。現在は動詞の人称変化提示・例文提示のツールが既に開発されている。

本発表では特に①ツールの趣旨や機能、および②ツール使用の利点と可能性について、実践例を交えて紹介する。

①に関して、ツール開発のコンセプトやツール機能などを報告する。②の利点については、CALL 教室等の特別な環境を必要としない、板書時間の短縮、エクセルデータさえ扱えれば手軽に利用できること等が挙げられる。更に、データは教員間で共有可能であり、それゆえ教員支援という側面も指摘できる。発表者は本ツール使用の可能性を模索する中で、例えば学習者に問題を作成させて全体に提示するなど、ツールをペアワークやプロジェクト授業と結びつける試みを行ってきた。いずれも授業を「教員主導」から「学習者中心」へと移行させることで、ツールの射程を少しでも拡張することを目指している。

発表では、実践例の紹介のみならず、パソコンを設置し、来場者にもツールを実際に操作・体験できる機会を提供する。最後にツール使用に関する今後の可能性について参加者と共に率直な議論を行う。その際、英語教員であるツール開発者にも来場して頂くことで、技術的な問題にも踏み込んだ議論を展開したい。